



刀剣圖(桑原文庫)より

《論文》

- 中村元博士の生涯と思想(講演録) 笠原 愛古
- 桑原文庫に見る桑原羊次郎の刀装具研究 佐藤 陽子

《資料紹介》

- 「御腰物御小道具帳」翻刻(部分) 佐藤 陽子・小林 准士

《報告》

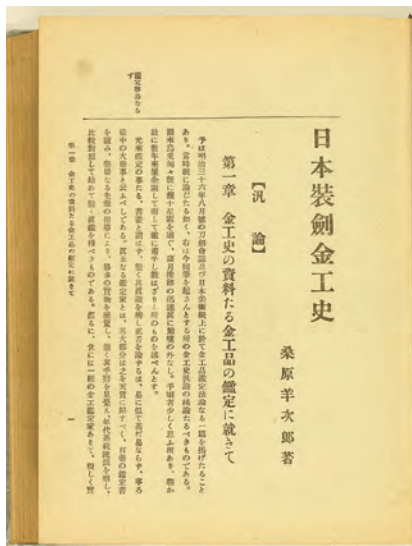
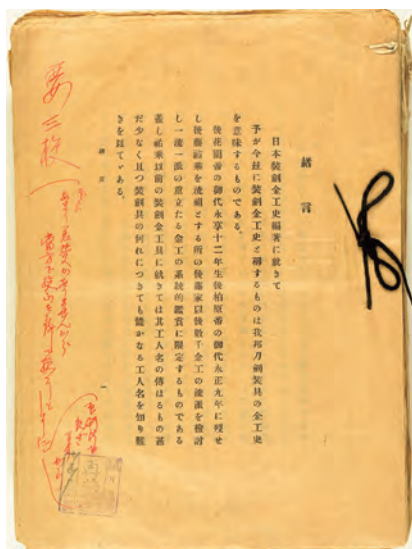
- 第9回大学図書館学生協働交流シンポジウムで実施したワークショップ等の内容および検討過程に関する報告 三村のぞみ

《本学教員が関わった本》

- 出口 顯・中村伶詞・佐藤桃子・岩田 淳・青木美穂

《書評》

- 出口 顯

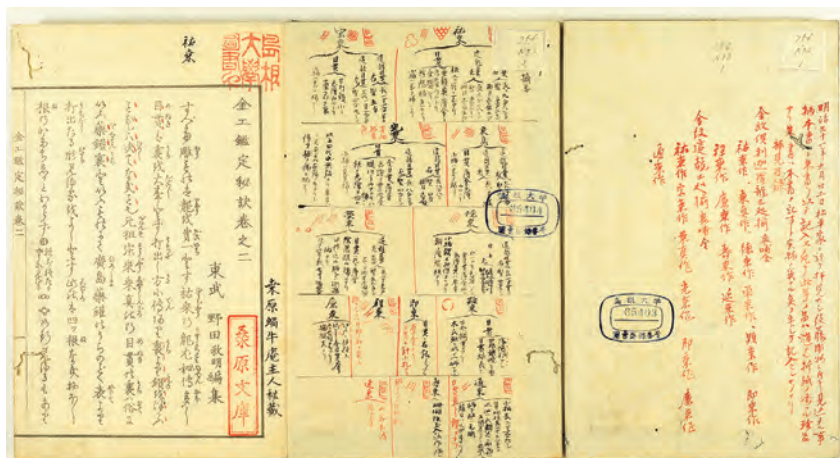


桑原羊次郎の著作と校正原稿（桑原文庫）

（上段）『日本装剣金工史』の校正原稿及び図版の元原稿

（下段）『日本装剣金工史』の完成版及び図版ページ

桑原羊次郎の刀装具研究における主著。序文には、「真正なる」刀装具鑑定家のあるべき姿が記述されており、ここから羊次郎の理想とする研究姿勢がうかがえる。



桑原文庫所蔵の刀装具関係資料

(上段)「後藤銘鑑」

(下段)『金工鑑定秘訣』

「後藤銘鑑」には、桑原羊次郎自身が後から当該資料に押形を追加したことを示す「雙蛙(双蛙)追加」の文字が見える。『金工鑑定秘訣』には、朱字で松平家が所蔵していた刀装具を実見したことなどが記されている。いずれも、羊次郎の刀装具研究の進め方を示す貴重な資料となっている。

松雲

第22号 2020.3.31 発行

《論文》

中村元博士の生涯と思想（講演録）…………… 笠原 愛古 4

《報告》

第9回大学図書館学生協働交流シンポジウムで実施した

ワークショップ等の内容および検討過程に関する報告…………… 三村のぞみ 17

《本学教員が関わった本》

神性と経験：ディンカ人の宗教…………… 出口 顯 31

地域協働による高校魅力化ガイド：

社会に開かれた学校をつくる…………… 中村 怜詞 33

新版 よくわかる地域福祉 …………… 佐藤 桃子 36

総合英語：医療従事者として最も大切なこと …………… 岩田 淳 39

p進ゼータ関数：久保田－レオポルドから岩澤理論へ…………… 青木 美穂 42

《書評》

ナショナルアイデンティティを問い直す…………… 出口 顯 45

《資料紹介》

[縦組]

「御腰物御小道具帳」翻刻（部分）…………… 佐藤陽子、小林准士 58

《論文》

[縦組]

桑原文庫に見る桑原羊次郎の刀装具研究…………… 佐藤 陽子 68

中村元博士の生涯と思想

中村元記念館学芸員 笠原愛古

本稿は、附属図書館において2019（令和元）年6月に開催した企画展『中村元記念館コレクション 丸山勇写真展「中村元とブッダのことば」』の期間中に行われた記念講演、「山陰が生んだ知識人たち—中村元と増田渉—」（2019（令和元）年6月22日）のうち、笠原氏の講演内容をまとめたものである。

~~~~~

只今ご紹介にあずかりました、中村元記念館学芸員の笠原と申します。

この度、中村元博士のご紹介をさせていただく機会をいただきました。島根大学法文学部長の田中則雄先生をはじめ、島根大学法文学部山陰研究センターと島根大学附属図書館の皆様、ならびにこの講演に足をお運びいただきました皆様にも感謝申し上げます。



記念講演のポスター

### 0. はじめに

それでは早速、中村博士の生涯と思想についてお話をさせていただきたいと思いますが、中村博士のご紹介のまえに、本日の主題が「山陰が生んだ知識人たち—中村元と増田渉—」となっておりますので、まずはじめに、この山陰にゆかりのある人物として知られる小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）と、中村博士とのつながりをお話したいと思います。

#### 0.1 小泉八雲と中村元

中村博士の著作の中に『比較思想の先駆者たち』<sup>1)</sup>というものがありまして、その中で中村博士はハーンについて書いておられますので見ていきましょう。引用します。

「ラフカディオ・ハーンといえば、日本の人々は松江を連想し、また松江といえば今日ではハーンをぬきにしては考えられない。(略) わたくしはハーンにはもちろん会ったことはないが、こどものころから親しみをもっている。(略) わたくしの母(中村トモ)はハーンが人力車に乗って出かけているのをよくみかけたという。(略) またわたくしの伯父、高橋勝(母の実兄)は、ハーンに英語を習ったという。」<sup>2)</sup>

引用を終わります。ここに出てくる高橋勝氏と中村博士の母トモがハーンに会ったという時期は、今で言うところとそれぞれ中学生と小学生ぐらいだった頃の話だそうです。中村博士がハーンの仕事の次のように評されています。引用します。

「ハーンの『怪談』その他には、多くの伝説口碑が書き記されているが、この地の文献にも見当たらずぬものが多い。ハーンが書いておいてくれなかったら、ついにすべて消え失せてしまったに違いない。(略) ハーンのように、日本人の心に、生活に、可能な限り接近して身を以て理解に努めた外国人は少いであろう。」<sup>3)</sup>

引用終わります。この「可能な限り接近して身を以て理解に努め」る研究態度は、中村博士が生涯を通じて、自ら実践されたことでもありました<sup>4)</sup>。

さて、前置きが長くなりましたが、中村博士の話に戻しましょう。ハーンが松江に滞在していたのが1890年から1891年ということですから、中村博士が松江でお生まれになるのはその20年後ということになります。

## 1. 中村元博士の略歴

中村元博士は、1912(大正元)年に島根県松江市殿町にお生まれになりました。中村家がかつてあった場所は松江市奥谷町ですが、母方の実家である殿町でお生まれになりました。元年に生まれたことで、元と名付けられたそうです。ただ翌年には、アクチュアリーをされていたお父上の仕事の都合で東京に移れることになります。

中村博士は、簡単に申し上げるならばインド哲学や仏教学という分野を研



究された学者で、わが国では「比較思想」という新しい学問分野を開拓したことで知られています。また東京大学名誉教授という肩書が物語るように永く東京大学で教鞭を執られた方でもあります。そして退官後は、自由な学問のために私塾「東方学院」を設立され、自らは東方学院長の肩書を好んで使われていました。その後は、1989（平成元）年に、ご自身の研究の成果により、「東洋思想研究の世界的権威」として松江名誉市民を贈られました。そして、1999（平成11）年10月10日午前10時、86歳でその生涯を閉じられるまで、1500点を数える著作や論文を遺されました。

## 2. 中村博士の学問的位置付け

中村博士は、生涯に2度の著作集を出されるという膨大な業績を残されましたが、現在の学問上どのように位置づけられているのでしょうか。

その一部に焦点をあてて申し上げるならば、アショーカ王の即位年代と仏滅年代との通説化<sup>5)</sup>をはじめとして、膨大な資料から歴史的人物としてのブッダの生涯を探究した『ゴータマ・ブッダ』（春秋社）<sup>6)</sup>、完成まで30年近い歳月をかけた『佛教語大辞典』（東京書籍）<sup>7)</sup>など複数の著作がとりあげられ、仏教を思想としてとらえ教団から自由な研究を行ったことで、「戦後を代表する印度哲学＝仏教学者」<sup>8)</sup>と評価されています。

中村博士は思想研究の分野においても、『比較思想論』、『世界思想史』など独創的な研究が知られていますが、伝統的な日本思想史、とりわけ近世仏教思想についての研究も高く評価されています<sup>9)</sup>。

それぞれの専門的な議論には立ち入りませんが、これらはいずれも2010年代以降に出された評価であり、中村博士の業績が現在もなお大きな影響を与えているということがわかりいただけるでしょう。

## 3. 少年時代の中村元

さて、その中村博士がお生まれになったのは1912（大正元）年と先ほど申し上げましたが、2012（平成24）年に中村博士の生誕100年を記念して松江市八束町に中村元記念館が開館いたしました。博士の蔵書3万4千冊の管理と、誰でも自由に学べるという博士の理念を継承した東方学院松江校を併設運営しています。

記念館では、博士の蔵書のほかにも、子供の頃の日記や作文なども展示しており、在りし日の博士の姿を垣間見ることができます<sup>10)</sup>。では実際に博士はどのような少年時代を送られたのでしょうか。

小学生時代は関東大震災で大阪に転居された一時期を除いて、東京の西片にある誠之小学校に通われました。この頃の得意な科目は歴史で、東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）で国史を教えられていた叔母の高橋壽恵子の影響が強かったのではないかと述懐しておられます。同じ町内に住まわれている中山久四郎（東洋史学者<sup>11)</sup>）からも「君はよく歴史を勉強しているね」と言われるほどでした。一方で、苦手な科目は音楽だったそうです。「歌舞音曲の類は聞いてはならぬ。見てもだめだ。」<sup>12)</sup>と教えられていたからかもしれません。中学生のころに中村少年が書いた作文には次のように書かれています。「私は小学校の時を考えて見ると、楽しく感じる事は一も二もなく好いていた。遊戯と娯楽は何よりも大好きであった。殊に教科書等の一ページよりも武勇談や小説の一行のほうがどんなに良かったかしれない。」と、当時の等身大の少年の姿が浮かんできます。

中学校への入学試験について書いた文章も残っています。「国語の試験二題の中一題は違へてしまった。始めからこうなのだから他はしれている。更に作文に至っては全く駄目である。平生は不勉強ばかり、(略)地理歴史は優しかったが、理科には全く途方に暮れた。数学も違へたところが相当あるらしい。」<sup>13)</sup>ある時、叔母の壽恵子から借りた本が難しいと嘆く中村少年に、「今、国語をよく勉強しておきなさい。試験だけではなく、将来のためにも必要なことなのだから……。」と諭されたといいます<sup>14)</sup>。

さて旧制中学の入学試験は無事合格したものの、その頃から体調を崩していた中村少年は病院で診察を受けます。結果は、腎臓の病気でした。当時の日記をみると、「手足を縛られ食物まで制限されてはただ悲嘆の一語のみ。」中学生にとっては過酷な療養生活であったことがみてとれます。医者からも運動を禁じられ、一度も登校しないまま結局一年間学校を休学することになりましたが、中村少年は「一年をくれたとて一生に関係はしない。今一年先に行ったとて後世に名を遺す人は何人あろう。伊能忠敬は、あの通り五十数歳からの晩学であったが、立派な業績を残した。過去は過去。観念すべきだ。」<sup>15)</sup>と気持ちを切り替えたのでした。



この時期から自然と読書をされるようになり、哲学書や宗教書を好んで読まれるようになったと後に述懐しておられます。中学一年の時に書かれた一文には、「宗教と云ふものは、或る偉大な一の物をおし立て、之を旨とし、以て世を精神的に治めるものである。」という中村少年の関心を象徴するような文章も見られます。

中学時代に中村少年の印象に残ったのは、木代修一という歴史の先生でした。「木代先生は当時の中学生には勿体ない程度の高い講義をされた。(略)学問に専念している人のすがたというものを身近に示されたような気がする。」この時に使われた教科書は「世界史」というもので、当時、国史、東洋史、西洋史と別々に教えられていた時代に、それらを総合した「世界史」として教えられたというのは「大きな卓見であった」そうです。

中村少年が中学四年生の時に書いた作文には「日本人の支那古典読解に対して採用した方法の歴史的過程」というものがあり、その最後には先生から「論理的な方面であるなら、どのような方面にも君の進む道が開け始めているということを確信する。幸に努力されよ」と、励ましの言葉が書かれています。

#### 4. 高校時代の中村元

この頃から中村少年は哲学に関心があり、当時の哲学を学ぶにはドイツ語を学ぶべきという風潮があったために、旧制第一高等学校に進学されると、フランス語、ドイツ語、英語の中から、ドイツ語を学ぶ文科乙クラスに進学されました。この頃教えられた先生には論理学者の須藤新吉先生<sup>16)</sup>、歴史学者の亀井高孝先生<sup>17)</sup>などがおりましたが、より決定的であったのがドイツ人のブルーノ・ペツォルド先生との出会いでした<sup>18)</sup>。ペツォルド先生は仏教の研究もされていたために、時折ドイツ語の授業のなかで仏教の話にも及んだそうです。後に天台宗の大僧都の位を贈られるこのペツォルド先生との対話のなかで、「仏教を思想的なものとして理解するためには、このドイツ人とのドイツ語による対話が多分にわたくしの理解を明確にし、確信を持たせるに至ったことは否定できないと思う」<sup>19)</sup>。と非常に強い影響を与えられたといいます。

## 5. 大学時代の中村元

仏教を思想として理解するという自らの関心に従って、東京大学のインド哲学科に進学します。中村博士はとりわけインド哲学と独創的な思想研究で評価されていますが、それはこの大学時代に会った二人の恩師の影響が強かったからと言われています。一人目は倫理学・日本倫理思想史などを教えられていた和辻哲郎先生で資料の取り扱い方などを<sup>20)</sup>、今一人が仏教について卒業論文を書いた中村青年に「日本仏教の源流であるインドを研究せよ」とインド哲学の道を示された宇井伯寿先生でした。

## 6. 中村博士の主な業績

中村博士は、大学院に進学され7年かけて、弱冠30歳で博士論文『初期ヴェーダーンタ哲学史』を書きあげ、31歳には東京大学の助教授になられます。中村博士はこれ以降膨大な著作を遺されたことは冒頭に触れましたが、ここで中村博士の代表的といえる著作を紹介します。

### 6.1 『初期ヴェーダーンタ哲学史』（岩波書店）

これは先に挙げた博士論文ですが提出の際には手押し車一杯の原稿であったために、指導教官の宇井伯寿先生が「これは読むのが大変だ」と声を上げられたといえます。この博士論文は『初期のヴェーダーンタ哲学』、『ブラフマーストラの哲学』、『ヴェーダーンタ哲学の発展』、『ことばの形而上学』の4巻本として出版され、日本最高の学術賞である日本学士院賞恩賜賞を受賞されます。後に『シャンカラの思想』が付け加えられ5巻で古代から中世までのインド哲学史を構成しています。

### 6.2 『佛教語大辞典』（東京書籍）

これは1975(昭和50)年に上下別巻の3巻本として出版されたものですが、1967(昭和42)年11月頃に20年かけた原稿を当時の出版社が紛失、さらに8年近い歳月をかけて完成させたものです。そのもとになったと言われているのが戦後まもなく1947(昭和22)年に出版された『佛教語邦訳辞典』で、その「はしがき」には博士の熱意を見て取ることができます。

「佛教の思想を理解し、それを平易な邦語で表現するということは、今後仏教徒にとっては最も必要なことである。たとひ佛教を信奉しない人でもその必要性を認めることに、やぶさかではないであろう。」

これは最初期の仏典には、漢訳仏典にみられる仏教独自の用語はなく平易な言葉で記されており、であるならば、わかりやすく「いまの日本人に共通のことば」、「日本の伝統に即した表現」にすることが必要ではないかと感じられたためでした。

### 6.3『東洋人の思惟方法』（春秋社）

中村博士の独創的な思想研究として知られるもので、『インド人の思惟方法』、『シナ人の思惟方法』、『日本人の思惟方法』、『チベット人の思惟方法』からなっています。2500年前のブッダの思想がそれぞれの国に伝わり、どのように異なる形で宗教化されたかを論じられたものです。それによって「東洋」とひとくくりにされる民族の多様性を明らかにされました。

これらは海外でも高く評価されロックフェラー財団の援助を得て英訳、第36代アメリカ大統領リンドン・ジョンソンに贈呈されました。のちに「韓国人の思惟方法」が追記され、『チベット・韓国人の思惟方法』として決定版中村元選集に収められています。

### 6.4『ゴータマ・ブッダ』（春秋社）

これは「2. 中村博士の学問的位置付け」で触れたものです。中村博士のブッダに関する著作は多くありますが、それらに通底する中村博士の「ブッダ」に対する研究態度は次のようなものでした。

「釈尊の生涯を述べた書としては、古来「仏伝」なるものが多数伝えられているが、それらは釈尊を讀えるあまり、幾多の神話・伝説にまとわれているために、まるで妖怪談を読むような印象を与える。しかしいかなる神話・伝説の奥にも、そのもとづく歴史的事実があったに違いない。(略) かれは突然天から降ってこの世に現れてきた存在ではなくて、南アジアの風土のうちに歴史的社会的な幾多の諸条件・制約のもとに、生まれ、育ち、活動し、

死んでいったのである。その事情を吟味することによって、はじめてゴータマ・ブッダ出現の世界史的意義を、われわれは理解することができる。」<sup>21)</sup>

「こういう試みは、後世の仏教徒が心にえがいていた釈尊のすがたをこわすことになるかもしれないし、また読者の希望と正反対のすがたがでてくるかもしれないので、それは残念であるが、しかしいたしかたない。歴史的研究は小説ではない。われわれは歴史的真実をめざすのである。そうして十分な批判検討をへて現わし出されたゴータマ・ブッダのすがたは、われわれに向かって直接に、かならずやなにか意義の深いことを教えてくれるであろう」。<sup>22)</sup>

これら中村博士のブッダに対する向き合い方からは、どこまでも学問的真理を追い求められた博士の姿が見えてきます。

## 6.5 『世界思想史』（春秋社）

『東洋人の思惟方法』、『比較思想論』を経て、完成まで30年近くかけて執筆された中村博士の思想史研究の集大成といえるものです。『古代思想』、『普遍思想』、『中世思想』、『近代思想』からなり、これはかねてより西洋の思想にくらべ東洋の思想が体系化されていないことを憂慮していた和辻哲郎先生の示唆があったと言われています<sup>23)</sup>。

## 7. 東方学院の設立

大抵の場合、国立大学を定年退官した大学教授は、私立大学に再就職されるものですが、中村博士は東京大学退官後に、自らの私塾「東方学院」を設立されました。中村博士は次のように語っておられます。

「東方学院といっても、事務所、教室、図書室があるだけで、あとは他のビルディングの部屋を借りて講義しているだけです。資金的には運営は大変ですが、募金はしないことにしているんです。学問研究に費やすべき時間を募金集めに使うのは、学者として矛盾していますから。」

「私のところでは、免状も学位もとれるわけではないんですが、ごく少数の篤学の士ばかりが集まっています。普通の大学ではできないような高度な講義や特殊な講義もできるんです。人生観や、哲学、宗教の問題から始まって、東洋医学でも東洋音楽でも、仏典購読でも、さらにサンスクリット語、ペリ語、チベット語、ベンガル語、ヒンディー語、タミル語、現代ギリシャ語など、自由にやれるのです。講義や演習の進め方も自由にしています。本当に学問に興味を持っている人にきてほしいわけです。」

「哲学に進むには、他に経済的手段を考えておきなさいといっているんです。アメリカでは、哲学の博士がやたらにふえて、行き場所がないんですが、お金がほしいときにはタクシーの運転手などをして、金がたまると、仕事をやめて詩をつくったり、カントを読んだりしている。(略) 学問は一生の仕事ですが、純粋な形で進めていくと、経済的にはひきあわないんです。私としては、だれにも強制されずに自分で新たなものを発見していくところに、学問の喜びを感じています。真理に行きつけないかもしれないが、人間として行きつけるところまで行きつきたい。そう思っています。」<sup>24)</sup>

## 8. 世界平和のための研究

中村博士が東方学院を設立されたのは、大学の外に制約を受けない学問所を作ろうとされたためでした。その中村博士の学問の特徴を一言で申し上げるならば、それが世界平和を目指した研究であったということでしょう。

中村博士の著作『比較思想論』にはご自身の研究の目的を書かれた箇所がありますので、引用します。

「比較思想論は世界平和の実現のための手がかりを供するものである。世界が狭くなり、世界が一つになる方向に進んでいる以上、人間の諸思想の相互理解がますます推し進められねばならぬ。ことに、異なった諸民族の対立相剋は、諸民族の文化の相互理解にもとづいて解消融和されねばならない。そのために人類の生んだ過去のもろもろの思想の対比検討と相互批判の必用が起こってくるのである。比較思想論は平和への道の門を開くものとなるであろう。」<sup>25)</sup>

この『比較思想論』を発展させた『世界思想史』のなかで中村博士は「仏教の教義学者たちが忘れてしまった諸思想を拾い出し、また教会が禁止した多くの思想を視界の中におくならば、東も西も同じ、たいして違わない」と結論づけられました。そして、人間性が同じであるならば、共通の論理を持つことが世界平和につながると確信され、遺著となる『論理の構造』（青土社、2000）をまとめられました。

## 9. 「慈しみ」と「温かなところ」

1999（平成11）年10月10日午前10時、中村博士は86歳の生涯を閉じられました。東京の多摩墓地と松江市八束町にある大塚山には「慈しみ」と題された言葉がきざまれています。

一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穩であれ、安樂であれ。

一切の生きとし生けるものは幸せであれ。

何びとも他人を欺いてはならない。たとどこにあっても他人を軽んじてはならない。互いに他人に苦痛を与えることを望んではない。

この慈しみの心づかいを、しっかりとたもて。

これは中村博士が原始仏典『スッタニパータ』から意識され、洛子夫人によって清書されたものが刻まれています。この「慈しみ」を博士はまた「温かなところ」と言い換えられています。

「私は長い間、東洋の思想・精神的伝統の探求をしてまいりました。それを貫く〈東洋のこころ〉というようなものがあるとすれば、それはいったい何か。その底に流れるものを求めての半生であったといっても、過言ではないように思います。そしてその〈何か〉とは、ひとり東洋のみのものではなく、<sup>あまね</sup>普く、広く、世界の人々にいきわたっているものに違いない。そのような確信をもつものです。その何かこそ、「温かなところ」ということではないかと思うのです」。<sup>26)</sup>

「慈しみ」あるいは「慈悲」という言葉はこれまで仏教的な枠組みの中で



重んじられてきました<sup>27)</sup>。しかしその自らの墓碑に刻まれた言葉ですらも、より広い立場の人に伝えられようとする中村博士の「温かなこころ」こそ、私たちに遺された世界平和への道しるべなのかもしれません。御清聴ありがとうございました。

- 1) 「東洋を見る—ラフカディオ・ハーン」『比較思想の先駆者たち』（広池学園出版部、1982）93-102頁。
- 2) 前掲書、97-98頁。
- 3) 前掲書、101-102頁。
- 4) 例えば『古代インド』（講談社学術文庫、2004）。

5) 「アショカ王の時代を仏滅百余年と伝える、北方經由でもたらされた漢訳仏典の伝承に基づく説で、北伝の説と言われる。宇井伯壽は、アショカ王の即位を紀元前二七一年とし、（略）ブッダ入滅を紀元前三八六年とした。その後中村元は、アショカ王の即位年を見直して、前二六八年とし、それによって紀元前三八三年を仏滅とした。現在ではこれがこの説の主流になっている」。池田練太郎「仏教教団の展開」『新アジア仏教史02 インドⅡ 仏教の形成と展開』（佼成出版社、2010年）121頁。

6) 「多くの資料を用いている点で中村元（1992〈A〉1992〈B〉）を凌ぐものは現われていない（なお、海外の仏伝研究に関しては中村元（2005）を参照されたい）。平岡聡「仏伝からみえる世界」『新アジア仏教史03 仏典からみた仏教世界』（佼成出版社、2010年）22頁。

※上記1992〈A〉は『中村元選集決定版第11巻ゴータマ・ブッダⅠ』（春秋社）、1992〈B〉は『中村元選集決定版第12巻ゴータマ・ブッダⅡ』（春秋社）。「中村元（2005）」は、中村元監修『エリアード仏教辞典』法蔵館、2005。

7) 「織田の『仏教大辞典』は小項目主義の辞典の代表で、今日でもその価値は衰えていない。同じような小項目主義の用語辞典としては、中村元『仏教語大辞典』（一九七五年）があり、語彙の多さと梵語との対照、説明のわかりやすさなどで定評を得ている」。末木文美士「仏教研究方法論と研究史」『新アジア仏教史14 日本Ⅳ近代国家と仏教』（佼成出版社、2011）331頁。

8) 「戦後を代表する印度哲学＝仏教学者は中村元（一九一二～九九）であろう。中村は宇井の後継者として若くして東京帝国大学助教授となった（一九四三年）。中村もまた、インド正統派であるヴェーダーンタ哲学の研究から出発して仏教研究に進んだ点で、印度哲学＝仏教学の伝統を継いでいるが、僧籍を持たず、既成教団から自由な研究を行ったという点では、従来の印度哲学＝仏教学とは異なるところがある。とりわけ原始仏教を重視したことは、従来の大乘仏教中心主義や日本仏教中心主義に対して大きな問題を提起するものであった。また、戦後のアジア・アフリカ諸国の台頭や社会科学の隆盛を受けて、社会経済史や

社会倫理の観点や近代化という視点を導入したり、あるいは古今東西にわたる該博な知識に基づいて比較思想的な研究へも幅を広げた。このような中村の方法は、宇井によって確立した印度哲学＝仏教学を継承しつつも、その護教論的体質を解体し、思想史として再編成しようとするものと位置づけることができるであろう。中村によって、インド学・仏教学は仏教者の間の閉じた教学から、より広い社会科学や人文科学の中に開かれることになった」。末本文美士「仏教研究方法論と研究史」『第14巻 日本Ⅳ近代国家と仏教』（佼成出版社、2011年）324頁。

- 9) 「(インド研究の合間に) 許されるほんのわずか時間だけ」(※1) に行ったものであり、日本の思想や仏教の歴史を網羅的に辿るものではない。しかしその中核となった近世仏教思想の研究は、その後の研究史に大きな影響を及ぼした」。西村玲「中村元—東方人文主義の日本思想史」オリオン・クラウタウ編『戦後歴史学と日本仏教』（法蔵館、2016.11）139-155頁。

※1 『近世日本における批判的精神の一考察』（三省堂、1949）

- 10) これまで中村元博士の生涯について、『学問の開拓』（佼成出版社1986、新装版ハーベスト出版2012）がよく参照され情報量も多いが、中村自身が「はしがき」で断っているように「わたくしが自ら執筆したものではなくて、編集部が読者諸氏の興味や意向を忖度して」作られたものであるため、学問的な利用にはより慎重な態度が求められよう。これに依拠した植木雅俊『仏教学者—中村元』（角川選書、2014）もあるが、まず参照すべきは中村自身の手になる「中村元」『私の履歴書—知の越境者』（日経ビジネス人文庫、2007）であろう。また筆者がかかわったものとして、中村自身のテキストに基づいて執筆された、中村元記念館編（前田専學監修）『中村元物語—世界平和を願った慈しみの思想家』（NPO法人中村元記念館東洋思想文化研究所、2016）がある。

- 11) 東京文理科大学教授

- 12) 「ラジオも、ニュース以外は聴いてはならない。歌舞音曲のたぐいは耳にすべからざるもの、もちろん口にすべからざるものと教えられた。」「学問の開拓」（佼成出版社、1986）34頁。

- 13) 「入学」『作文集第一（巻）②』大正14年。

- 14) 「悲しき思い出」『作文集第二（巻）』大正15年。

- 15) 「十一月六日」『作文集第一巻①』大正14年。

- 16) 須藤新吉（論理学者：1881-1961）著作には『ヴントの心理学』『論理学綱要』など。「あるとき学術や技能の習得は段階的になされるのであるから、或る時期には集中的に努力して一定の段階に達するように心がけねばならぬ」『東方の英知』（玉川大学出版部、1979）13頁。

- 17) 亀井高孝（歴史学者：1886-1977）江戸時代にロシアに漂着した大黒屋光太夫に関心を持ち、ヨーロッパとアジアの枠を超えた歴史研究を遺す。著作は『世界史年表・地図』、『東ローマ帝国史』、『大黒屋光太夫』など多数。

「ドイツ語の西洋史の大きな原書を与えられ、その要点を訳出して来いとめいぜられたことがある。それは貧書生を恵んでやろうという親心からであったが、わたくしにとっては大変な勉強になった。(中略) わたくしの専攻は先生のなさったこととかなり離れていたが、しかしもしもわたくしの研究に従来の研究とは異なった新しいものがあつたとしたら、それは先生に負うところが大きいのである。」『東方の英知』（玉川大学出版部、1979）18-19頁。

18) 仏教学者：1873-1949

19) 『東方の英知』（玉川大学出版部、1979）19頁。

20) 和辻哲郎（哲学者・文化史家：1889-1960）大学で倫理学・日本倫理想史などを教える。特に倫理学は大講堂を埋め尽くした生徒を酔わせるような名講義だったと言われる。

「専門家は非常に珍しい特殊な資料を見つけて、鬼の首でもとったようにそういうものばかりを取り上げたがるが、実はありふれた周知の資料の中から大切なことをいくらかでも取り出せるのではないですか？」

（「中村元」『私の履歴書—知の越境者』（日経ビジネス人文庫、2007）156頁。）

21) 「はしがき」中村元『ブッダ入門』（春秋社、1991）。

22) 「旧版はしがき」『ゴータマ・ブッダ I』（春秋社、1992）。

23) 和辻の言として、「西洋では一貫した思想史がキチンと出来ている。ところが東洋についてはそれができていない。それをまとめてもらいたい。」（「中村元」『私の履歴書—知の越境者』（日経ビジネス人文庫、2007）158頁。）

24) 「中村元 インド哲学、仏教、比較思想論」『講義のあとで』日本リクルートセンター出版部、1980）15-27頁。

25) ⑬『比較思想論』岩波書店、1965年、330-331頁

26) 中村元『温かなこころ』春秋社、1999.3 i-ii 頁。

27) 「本当に我々は、いかなる世界をつくるかという理想をもって進むべきだと思います。それにはやはり人を損なわない、傷つけないという教えですね。(略) これは生きとしいけるものを傷つけない、共に生きるという温かな理想です。(略) ほかの教えでも同じようなことを説かれますけれども、しかし、とくにインドから発してアジアの国々に広まり、東海の我が国に及びましたこの仏の教えにおきましては、人々に対する「温かなこころ」ということをとくに説いているように思います。これは仏教の伝統的な言葉で申しますと慈悲ということですね。ここに教えの真髓が極まっているのではないかと思います。」（中村元『温かなこころ』春秋社、1999.3）8 頁。また「温かなこころ」と仏教の「慈悲」のつながりをより強調したものとしては、前田専學「中村元先生と仏教」『大法輪』（2019年3月号）、大法輪閣、14-35頁。

## 第9回大学図書館学生協働交流シンポジウムで実施した ワークショップ等の内容および検討過程に関する報告

島根大学企画部図書情報課情報サービスグループ 三 村 のぞみ

### 1. はじめに

本稿は、2019（令和元）年9月に行われた第9回大学図書館学生協働交流シンポジウム（以下、シンポジウム）のワールドカフェとワークショップに焦点を当てたものである。このワークショップ等の内容、検討の過程、実施した結果、実施しての所感が主な内容となっており、このシンポジウムで行ったワークショップ等の詳細は第3章に記した。類似のワークショップ等を企画している方の参考になれば幸いである。

### 2. 第9回大学図書館学生協働交流シンポジウムの概要

このシンポジウムは、2019（令和元）年9月5日（木）、6日（金）に、島根大学を主会場として行った。大学図書館学生協働交流シンポジウム<sup>1)</sup>は、大学図書館で学生協働を行う学生および教職員を対象として、2010（平成22）年から開催されている。当初は島根・山口両県の4大学が中心であったが、徐々に参加館が増え、第9回は、全国各地から24大学（28団体）、116名が参加した。

#### 2.1 第9回大学図書館学生協働交流シンポジウムのプログラム

第9回大学図書館学生協働交流シンポジウムのプログラムは以下のようなものである。なお、当日の様子は、当館のブログ<sup>2)</sup>を参照していただきたい。

表1 シンポジウム2日間のプログラム

| 1日目（9月5日） |                                       | 2日目（9月6日） |                          |
|-----------|---------------------------------------|-----------|--------------------------|
| 12：00     | 受付                                    | 9：00      | ワークショップ「“やりたいこと”を形にしよう！」 |
| 13：15     | 開会挨拶 服部泰直島根大学長                        | 11：55     | 閉会                       |
| 13：30     | ポスターセッション「活動紹介」                       | 12：05     | 昼食・移動                    |
| 14：40     | ワールドカフェ「ワクワクする図書館をつくるために、あなたは何をしますか？」 | 13：00     | 島根県立大学松江キャンパス図書館見学       |
| 17：30     | 島根大学附属図書館内自由見学                        | 14：00     | 図書館見学終了                  |
| 18：00     | 交流会                                   |           |                          |

### 3. ワールドカフェとワークショップの概要

このシンポジウムの目指すところは、参加者の「やりたいこと」を明確化し、実施可能な計画に落とし込むことである。これを達成するために、1日目のワールドカフェで「やりたいこと」を明確化してアイデアを創出すること、2日目のワークショップで、このアイデアを実施可能な計画に落とし込むことを達成目標とした。なお、参加者は、予め主催者側で5～6人のグループに分けておき、1日目と2日目ではメンバー構成を変えた。それぞれの概要について、次項で述べる。

#### 3.1 ワールドカフェの概要

ワールドカフェの概要について、以下の表に示す。

表2 ワールドカフェの概要

| 1日目 ワールドカフェ<br>「ワクワクする図書館をつくるために、あなたは何をしますか？」 |                                                          |
|-----------------------------------------------|----------------------------------------------------------|
| 導入<br>アイスブレイク                                 | ①話をやめるタイミングの練習                                           |
|                                               | ②自己紹介                                                    |
|                                               | ③連想ゲーム                                                   |
|                                               | ④他己紹介                                                    |
| ワールド<br>カフェ                                   | ⑤説明                                                      |
|                                               | ⑥第1ラウンド「あなたがワクワクするのはどんなときですか？<br>また、どうしてワクワクするのだと思いますか？」 |

|  |                                                          |
|--|----------------------------------------------------------|
|  | ⑦第2ラウンド「あなたがワクワクするのはどんなときですか？<br>また、どうしてワクワクするのだと思いますか？」 |
|  | ⑧第3ラウンド「あなたが最高にワクワクする図書館とは？」                             |
|  | ⑨ハーベスト                                                   |

①話をやめるタイミングの練習では「どこからどうやって（交通機関）島根にきましたか？」という問いに対して、グループ内で雑談を行った。その後、頃合いを見てファシリテーターが手を挙げ、それに気づいた参加者から話すのをやめて手を挙げ、全員が静かになるまで手を挙げておくという方法をとった。この練習をしたのは、ワールドカフェで各ラウンドのダイアログを終わる際に、ファシリテーターが大声でアナウンスすることにより強制的に話を中断させられることを防ぎ、緩やかに場が静かになるようにするためである。次に②自己紹介、③連想ゲームを行った。グループのメンバーは初対面であるため、次に挙げる④他己紹介を含めて自己紹介やアイスブレイクの機会を多くとった。

④他己紹介<sup>3)</sup>は、ワールドカフェを行うにあたって重要な要素となる「傾聴」の練習をするために行った。

⑤説明においては、ワールドカフェではダイアログを行うこと、雑談や討論とダイアログの違い<sup>4)</sup>、ダイアログを行うときのコツに重点を置いた。

⑥第1ラウンドは、予め分けられたグループで、「あなたがワクワクするのはどんなときですか？ また、どうしてワクワクするのだと思いますか？」という問いについてダイアログを行った。

⑦第2ラウンドは、グループに一人を残し、残りのメンバーはそれぞれ違うテーブルへ移動し、第1ラウンドのグループでどのようなダイアログが行われたか共有したうえで、同じ問いについてダイアログを行った。

⑧第3ラウンドでは、第1ラウンドのテーブルに戻り、第2ラウンドでどのようなダイアログが行われたか共有した上で、「あなたが最高にワクワクする図書館とは？」という問いについてダイアログを行った。

⑨ハーベストとは「収穫」の意味で、このワールドカフェにおいては、ダイアログの中で生まれた発想を具体的なアイディアの形にすることを目標として行った。具体的には、「参加者が最高にワクワクする図書館」をつくるためのアイディアを5つ以上考える活動を行った。この活動は2段階に分け

で行い、第1段階では、A4用紙に思いつくかぎりのアイデアを記入する。第2段階では、発想カードを使って更にアイデアを引き出すこととした。発想カードの内容を次に示す。

表3 発想カードの内容

|                |         |                |          |
|----------------|---------|----------------|----------|
| 図書館×夜          | 図書館×SNS | 図書館×<br>〇〇とコラボ | 図書館×クイズ  |
| 図書館×映画         | 図書館×料理  | 図書館×カラフル       | 図書館×カフェ  |
| 図書館×水槽         | 図書館×絶叫  | 図書館×探偵         | 図書館×フェス  |
| 図書館×<br>ファッション | 図書館×アプリ | 図書館×<br>コンテスト  | 図書館×運動会  |
| 図書館×<br>マッサージ  | 図書館×旅   | 図書館×ゲーム        | 図書館×ビジネス |

時間内にアイデアを5つ出せなかった人は翌日までの宿題とし、1日目のワールドカフェは終了した。

## 3.2 ワークショップの概要

ワークショップの概要について、前項と同様に示す。

表4 ワークショップの概要

| 2日目 ワークショップ<br>「やりたいこと」を形にしよう！」 |                        |
|---------------------------------|------------------------|
| 導入<br>アイスブレイク                   | ①グループ内で自己紹介            |
|                                 | ②ワンワード                 |
| ワークショップ                         | ③説明                    |
|                                 | ④企画シートの記入              |
|                                 | ⑤グループ内で発表・フィードバック（1回目） |
|                                 | ⑥ブラッシュアップ（1回目）         |
|                                 | ⑦グループ内で発表・フィードバック（2回目） |
|                                 | ⑧ブラッシュアップ（2回目）         |
|                                 | ⑨グループ内で企画のプレゼン         |
|                                 | ⑩各グループの代表企画を1つ選出       |
|                                 | ⑪全体発表                  |



①自己紹介の次に②ワンワードというゲームを行った。ワンワードは、「昔々」「おじいさんと」「タピオカが」のように、一文節ずつつなげて物語を創作していくというものである。2日目は、1日目よりも打ち解けているであろうことを見越して、自己紹介やアイスブレイクの時間は短くした。

③ワークショップの説明の後、④企画シートの記入を行った。1日目で創出したアイディアから「自分が最もワクワクするもの」という基準で一つ選び、シートに記入することとした。企画シートの項目は、「企画名」「グループ名」「企画の背景・動機」「企画内容」「企画の目的（ゴール）」「企画を行うにあたり不安なこと、実行をためらう理由、悩み」「メモ欄」であった。

⑤～⑥では企画シートに書いた内容を、グループ内で順番に発表し、メンバーからフィードバックを得た。発表を聞いたメンバーは、「主催者目線」でアドバイスやコメントを付箋に記入し、発表者に渡す。発表者はそのフィードバックを参考にして、自分の企画をブラッシュアップした。

⑦～⑧では、グループに一人を残してそれぞれ別のテーブルに移動し、再び企画の発表フィードバック、ブラッシュアップを行う。要領は⑤～⑥と同様だが、ここでのフィードバックは、「参加者目線」で行うこととした。

⑨～⑩では、元のテーブルに戻り、2グループを1つに合体して、10人程度のグループを作り、ここで2回のブラッシュアップを経た最終版の企画を発表する。その後、グループ内で最も「ワクワクする企画」に投票し、グループの代表となる企画を選出する。

⑪企画シートをハンディスキャナで読み取り、それをスクリーンに投影しながら、全体に向けて代表企画の発表を行った。

ワークショップの内容は以上である。

## 4. 検討の過程

ワークショッププログラムの作成にあたっては、学生の意見を取り入れ、日本ファシリテーション協会会員で島根大学名誉教授の荒川長巳先生より指導を受けながら行った。当該プログラム作成の経緯を以下に示す。

### 4.1 シンポジウムの方向性の決定

シンポジウムを開催するにあたり、まず、どのようなシンポジウムにする

か、方向性を決める必要があった。方向性に学生の意見を取り入れるため、本学の学生協働団体「図書館コンシェルジュ」（以下、コンシェルジュ）の学生と、彼らのサポートをする職員を集めて座談会を行った。座談会では、「あなたが1～2日費やすに値するイベントとは？」という問いに対して各々が重要と考える要素を付箋に書いて共有し、似たアイデアをグルーピングしてラベルを与えた。この結果、導き出された要素は以下のようなものである。

交流、楽しい、新しい発見、スキルアップ、平等、準備・進行のスムーズさ、途中退室可

これらの要素をもとに、コンシェルジュと叩き台を作成し、荒川先生のご指導を得て、次のような当初案を作成した。

#### 4.2 当初案の概要

案の概要を以下に示す。

表5 当初案 ワールドカフェの概要

| 当初案 ワールドカフェ   |                                                                                  |
|---------------|----------------------------------------------------------------------------------|
| 導入<br>アイスブレイク | ①ワンワード                                                                           |
|               | ②他己紹介                                                                            |
| ワールド<br>カフェ   | ③説明                                                                              |
|               | ④第1ラウンド「あなたがワクワクするのはどんなときですか？ また、どうしてワクワクするのだと思いますか？」                            |
|               | ⑤第2ラウンド「“ワクワクする図書館”という文字を見たとき、どのようなイメージが浮かびますか？ あなたの思う“ワクワクする図書館”とは、どのようなものですか？」 |
|               | ⑥第3ラウンド「“ワクワクする図書館”をつくるために、あなたは何をしますか？」                                          |
|               | ⑦ハーベスト                                                                           |

複数のラウンドで同じ問いに取り組むと冗長に感じられる恐れがあるため、④第1ラウンド、⑤第2ラウンド、⑥第3ラウンドそれぞれで問いを変えた。また、第3ラウンドで具体的にアイデアを出すこととし、⑦ハーベ

ストにおいて、その中から一番良いと思うアイデアを各自で選ぶこととした。

表6 当初案 ワークショップの概要

| 当初案 ワークショップ   |                         |
|---------------|-------------------------|
| 導入<br>アイスブレイク | ①後出しじゃんけん               |
| ワークショップ       | ②グループ分け（マグネットテーブル）      |
|               | ③グループメンバー内でアイデアの背景を共有する |
|               | ④グループのアイデアのゴールを決める      |
|               | ⑤アイデアの発散                |
|               | ⑥アイデアの収束                |
|               | ⑦実施計画書の記入、発表分担決定        |
|               | ⑧発表（ポスターセッション形式）        |

②グループ分けでは、マグネットテーブルという手法を一部取り入れて使用することにした。マグネットテーブルとは、近しいアイデアや興味深いアイデアを持った人とグループを形成する手法で、今回のワークショップでは、次のように取り入れて行うことを想定した。

ワールドカフェで創出したアイデアをA4用紙に書き、胸のあたりに持って自分以外の参加者に見えるようにする。参加者は紙を持ったまま無言で会場を歩き回り、似たようなアイデアを持つ人や、自分のアイデアと一緒にすると面白い化学反応が起きそうなアイデアを持つ人と4～5人のグループを形成する。言葉を発してもよいということにすると、各々が自分のアイデアについて口頭で説明を始めるため、次の人のところへ行くまでに時間がかかり、時間内にグループ分けが終わらない恐れがあった。こうした理由もあり、無言というルールが設定されている。グループ分けが終わった後のプログラムでは話してもよいこととした。

その後③グループメンバー内で、持ち寄ったアイデアの背景を共有し、④グループのアイデアのゴールを決めるのだが、ここでは、話し合って決めたゴールを「○○な図書館にするために、△△を実行するにはどうしたらいいか？」という問いの形に落とし込み、模造紙の中央に書いた。ここで意

図したことは、あくまでゴールを決めるだけであり、実行するためのアイデアは次の段階で出していくということだった。

⑤アイデアの発散では、グループで決めたゴールを達成するためのアイデアを可能な限り付箋に書き、④で書いた問いの周りに貼っていく。アイデアを出すにあたっては、「相手を否定しないこと」「質より量にこだわること」に留意する。その後⑥アイデアを収束させるための話し合いを行うが、このときに、発散で出たアイデアを必要に応じて取捨選択しながら、実現可能な企画に落とし込んでいく。最終的な企画の形について、全員が合意できるよう注意しながらダイアログを行っていくこととした。

⑦実施計画書の項目は、「企画名」「グループ名」「企画内容」「企画の背景・動機」「企画の目的（ゴール）」「対象者」「おおよその実施時期」「スケジュール」「広報手段」「必要物品」「その企画を行うのに必要なスタッフ・役割」「企画を立てる上で苦労した点」であった。実施計画書が完成したら、⑧ポスターセッション形式で発表し、成果を全体で共有することとした。

以上のように当初案を作成し、コンシェルジュと島根県立大学・島根県立大学短期大学部松江キャンパスの学生協働団体に属する学生を対象として、リハーサルを行った。シンポジウム本番では1日目にワールドカフェ、2日目にワークショップを行ったが、このリハーサルにおいては、1日で終わらせる必要があったため、午前にワールドカフェ、午後にワークショップという構成で行った。

#### 4.3 リハーサルの結果

リハーサルは、2019（令和元）年7月6日（土）に、島根大学附属図書館本館多目的室で行った。この結果、様々な課題が浮き彫りとなった。

まず全体として、アイスブレイクやワールドカフェ、ワークショップの説明とスライドが参加者にとってわかりにくく、戸惑いを与えた。特にアイスブレイクでは、ファシリテーターがスライド上の文字を読み上げて説明を行うだけであったため、参加者がイメージを掴むことが難しかった。

午前のワールドカフェでは、それぞれのラウンドで異なる問いを設定していたため、各ラウンドでのダイアログが深まりきらないうちに別の問いに変わってしまうという状況が発生した。

午後のワークショップでは、グループのゴールを決めたり、発散したアイデアを収束させてひとつの企画に落とし込んでいったりする際に、全員が合意する結論に達することが難しい様子が見られた。これは、異なる種類のアイデアが集まったグループで特に顕著だった。また、ワークショップ中に、グループ内の合意形成が難しい様子を見て、予め指示していた方法とは異なる合意形成の方法を途中でファシリテーターが指示する場面もあったため、参加者に混乱を与えた。

合意形成ができたグループでも、アイデアの発散を行う前に、ゴールを達成するために実行する具体的な企画が決定しているという事態が発生した。これは、グループで持ち寄ったアイデアのゴールを決める際に、問いを「〇〇な図書館にするために、△△を実行するにはどうしたらいいか？」というものにしていたため、自然と具体的なアイデアを出し合い、その話し合いの中で実行する企画が決まってしまった。

他にも、実施計画書の項目が詳細すぎて書きにくいといった意見や、ファシリテーターの指示する時間配分が複雑でわかりにくいといった意見があった。

これらすべてはワークショップをデザインしたファシリテーター側のミスによるものであり、この結果を受けて、以下のように作り直すこととした。

#### 4.4 失敗を受けた再検討

まず全体として、説明が伝わりやすいよう、説明する概念をスライドで可能な限りビジュアル化した。アイスブレイクについても、説明の後、ファシリテーターと補佐のスタッフが実際にやってみせることとし、参加者がイメージを掴みやすくなるようにした。また、シンポジウムで初めて会う参加者同士がより打ち解けることができるよう、自己紹介やアイスブレイクの数と構成を見直した。

ワールドカフェについては、第1ラウンドと第2ラウンドの問いを同じものとし、より深くダイアログを行えるようにした。また、ハーベストについても、次で説明するワークショップの変更に合わせて、ダイアログで得た知見や発想から、自分が実行したいアイデアを各自で創出するというものを作り変えた。

ワークショップについては、根本から見直すこととなった。まずマグネットテーブルを用いたグループ分けを行わず、グループのメンバーを予めファシリテーター側で決めておくこととした。次に、各メンバーのアイディアを一つにまとめることは難しいと判断し、各自のアイディアから個人の企画を作り出すこととした。あわせて実施計画書の項目の内「スケジュール」などの詳細すぎる部分を削除し、参加者が自分の企画について他のメンバーからアドバイスを受けることができるよう、「企画を行うにあたり不安なこと、実行をためらう理由、悩み」や「メモ欄」を付け加えた。ワークショップ内でグループのアイディアのゴールを決めることはなくなり、アイディアを選ぶ場合の判断基準は「ワクワクするかどうか」に一本化した。各パートの時間配分は、スライドに表示し、いつでも確認できるようにした。

これらの修正を経たワールドカフェとワークショップの内容は、3.1および3.2に記したとおりである。

## 5. シンポジウム当日の様子

当日は、目立ったトラブルもなく、ワールドカフェとワークショップを実施することができた。参加者の感想は、次項で述べる。

### 5.1 当日アンケートの結果

ワールドカフェ等を含むシンポジウムの満足度は、参加者への当日アンケートの結果、次のようになった。なお、当日アンケートの回収数は、全参加者116名の内91名分であり、回収率は約78%であった。

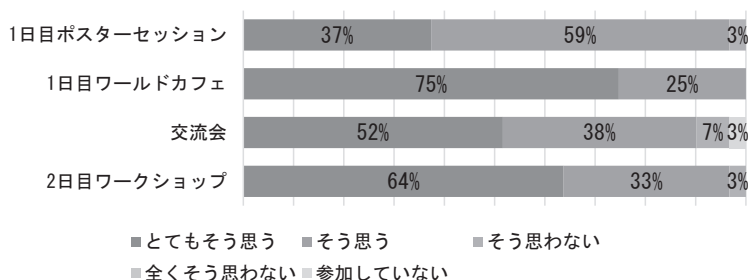


図1 「シンポジウムのプログラムに満足しましたか」への回答

個別の感想をいくつかピックアップする。ポジティブな感想では、「有意義だった」「他の団体のメンバーと交流することができてよかった」「ワクワクした」などがあり、ネガティブな感想では、「長かった」「交流会の時間が遅いことに加え、宿題を出されると睡眠時間が足りない」「もう少し大学生っぽいのができたら良かった」などがあり、他にも「2日目のワークショップのコメントでは悪い点も指摘したほうがより良い企画になる」というアドバイスもあった。ワールドカフェとワークショップ以外の感想では、「1日のくわしいスケジュールなど、事前資料の情報が少なかった」「ポスターセッションの時間が少なかった」など、シンポジウム全体では様々な課題が発見されたが、ワールドカフェとワークショップの満足度は、概ね高い結果となった。

当日アンケート結果の概要は、シンポジウム特設サイト上<sup>5)</sup>で公開している。

## 5.2 事後アンケートの結果

シンポジウムで行ったワークショップの効果を検証するため、事後アンケートを行った。2019（令和元）年12月、シンポジウムへの参加者のうち、特に学生を対象として事後アンケートへの協力を依頼し、1月末までを期限として集計を行った。アンケートの回答数は、全学生参加者90名の内30名であり、回答率は約33%であった。

以下に回答の抜粋を示す。

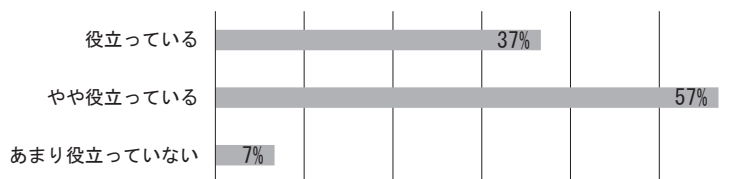


図2 「シンポジウムに参加したことが、現在、活動で役に立っていますか」への回答



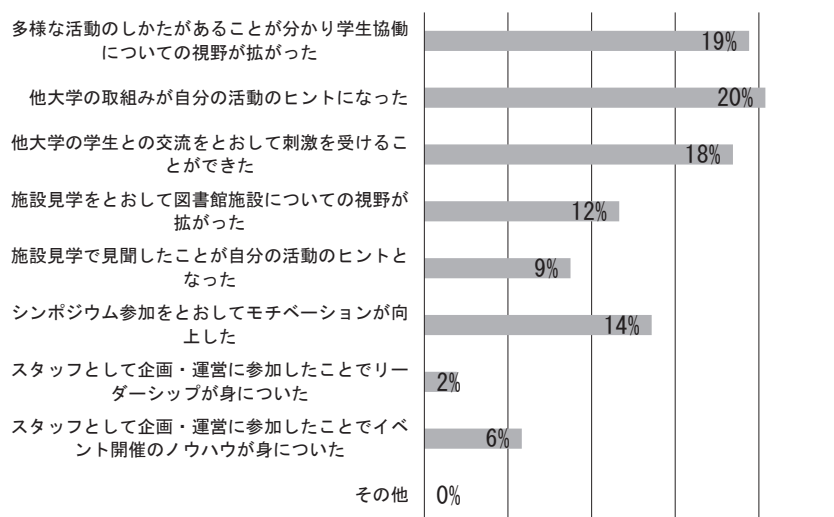


図3 「(図2で「役立っている」「やや役立っている」と答えた方へ) シンポジウムに参加してどのような点が役立ちましたか」(複数回答可) への回答

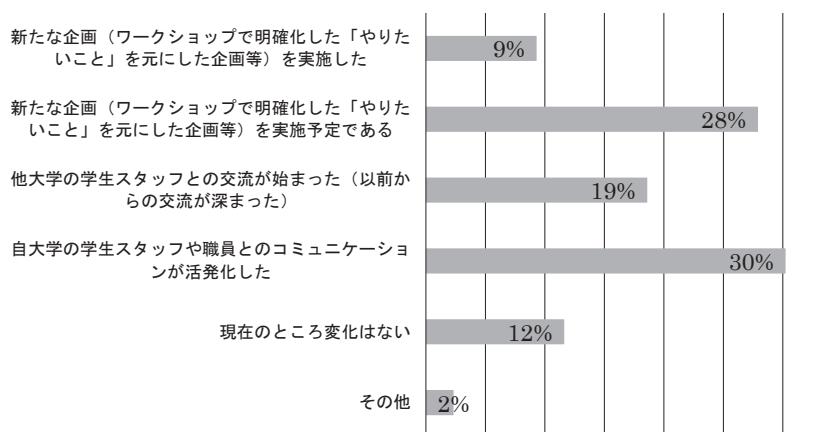


図4 「(図2で「役立っている」「やや役立っている」と答えた方へ) シンポジウムに参加した後、あなたの活動はどう変化しましたか」(複数回答可) への回答

図2では、ワークショップを含むシンポジウムの内容は「役立っている」あるいは「やや役立っている」と回答した人が多く、具体的に役立っていると感じた点は図3の通りである。ワークショップに関することでは、図4にある通り、シンポジウムで創出した企画を「実施した」という回答と「これから実施予定である」という回答を合わせると37%であった。回答者は全学生参加者の33%程度に留まり、全ての学生参加者から回答を得たわけではないが、一定の成果があったと言えよう。

## 6. 所感、今後の展望

今回、荒川先生の指導を受けながらワークショップを実行してみて、効果的なワークショップを行うことの難しさと面白さを感じた。効果的なワークショップでは、組み込む個別の要素、その配置、説明の一言一句にまで意味があり、無駄なことは一つもない。特に説明は、言葉の選択を誤るとファシリテーターの意図するところが全く伝わらない恐れがある。それを回避するためには、説明やスライドを何度も見返し、もっとよい言い回しや見せ方がないか、無駄な部分がないか、自信を持てるまで繰り返し修正するしかない。

また、設計した内容で問題ないと思っても、実際に行ってみるまでは成功するか失敗するかわからないのが、ワークショップの恐ろしいところである。今回のワールドカフェとワークショップが成功した要因の一つは、事前にリハーサルを行い、問題点を洗い出したことである。リハーサルを行わなければ、100名以上が参加するワークショップで、リハーサルで起きたような混乱が生じていた可能性が高い。今後新規にワークショップを行うことを検討している場合は、学生などがどうしても確保できなければ、館内のスタッフだけでも構わないので、事前にリハーサルを行うことを勧めたい。

さて、今回作成したワールドカフェとワークショップは、課題が全くないわけではないが、図書館でアイデアを創出するワークショップとしては一定の質を持つものが完成したと思う。方向性を決めるにあたって協力してくれた本学のコンシェルジュ、図書館スタッフ、リハーサル及び当日の運営に参加して下さった島根県立大学・島根県立大学短期大学部松江キャンパスの学生および図書館スタッフの皆様、そして何より、ワールドカフェやワークショップの基本的なデザインを行ってくださり、最終的な形ができあがる

までご指導くださった荒川先生に深く感謝申し上げます。

### 参考文献

- 1) 大学図書館学生協働交流シンポジウム開催の経緯については、以下の報告に詳しく述べられている。  
岡崎聡志, 昌子喜信. 全国の学生協働をつなげる：大学図書館学生協働交流シンポジウムの取組み. 大学図書館研究. 2015, 102, 54-64, <https://doi.org/10.20722/jcul.332>, (参照2020-2-25).
- 2) “第9回大学図書館学生協働交流シンポジウムを開催しました”. 島根大学附属図書館のブログ. 2019-09-13, <http://shimadai-lib.hatenablog.jp/entry/2019/09/13/114756>, (参照2020-2-25).
- 3) このシンポジウムにおいて、他己紹介は次のような要領で行った。まず2人ないし3人の小グループに分かれ、その中で聞き手と話し手に分かれる。交互に自己紹介を行い、その後に聞き手が話し手に質問をし、聞き手は話し手がどんな人物かメモしておく。すべての自己紹介が終わったところで、聞き手が、自分と組んだ話し手を他のグループメンバーに向けて紹介する。
- 4) このシンポジウムでは、次のように定義した。雑談は、「楽しいおしゃべり」であり、あまりテーマを深く掘り下げていくものではない。議論は、誰が正しいか決めるものであり、意見が衝突してしまうこともある。ダイアログは、言葉を通して深い相互理解に達したり、新しい気づきを得たりするためのものである。
- 5) “アンケート”. 第9回大学図書館学生協働交流シンポジウム, <https://www.lib.shimane-u.ac.jp/LAS/#questionnaire>, (参照2020-2-25).




---

 本学教員が関わった本

## 神性と経験：ディンカ人の宗教

ゴドフリー・リーンハート 著/  
 出口 顯 監訳、坂井 信三・佐々木 重洋 訳  
 法政大学出版局、2019年7月

紹介者

出 口 顯  
 (法文学部 教授)

本書の原著は1961年に出版された。著者であるリーンハート（1921-1993）は長らくオックスフォード大学で社会人類学（イギリスでは文化人類学をこう呼んだ）を講じた著名な研究者である。本書の他に著書として、すぐれた概説書として長く読まれてきた『社会人類学』（増田義郎・長島信弘訳、岩波書店、1967年）がある。

本書も、南スーダンの牧畜民ディンカの神観念や神話・儀礼を扱った民族誌として、アフリカ研究や文化人類学だけにとどまらず、哲学やギリシア古典研究でも高い評価を得ている。1966年の『アフリカ研究』2号に本書の書評を執筆した、当時東京大学大学院生だった故阿部年晴氏は、その前年に出版した『アフリカの創世神話』（紀伊國屋新書）でも、本書に登場する神話とリーンハート

の解釈を紹介しており、ディンカの世界観とその神話は日本でも文化人類学にとどまらずよく知られることになった。それゆえ『社会人類学』同様、本書ももっと早くに翻訳されてしかるべき書物であった。とはいえ、もともとリーンハートが英文学専攻だったこともあるためか、本書の英語は凝った文体で書かれた難解なもので、訳者たちは大いに苦勞したのだが、それだけに原著刊行後60年近く経っても翻訳が出なかったのは首肯できるところではある。

翻訳を思い立ったのは、『社会人類学』の訳者でリーンハートのもとで学ばれた長島信弘教授からお誘いを受け、リーンハートについて一文を書いたことがそもそものはじまりである。それがきっかけで、共訳者の方たちと2013年からリーンハートの論文や『社会人類学』の読書会を

はじめた。リーンハートは面白いということで意見が一致した三人が、ならば『神性と経験』の翻訳をという運びになった。

社会人類学の歴史は、それまでの理論や学説を批判することで新しい時代を築いてきたことの繰り返しであると、リーンハートは別のところで述べている。だとしたら60年前の本書は相当に時代遅れで訳す価値など今ではないことになってしまうのだろうか。

そうではない。よくいわれることだが古典とは、時の経過による腐蝕にも耐えてなお輝きを失わない書のことであり、また後世の研究の手がかりになる示唆や暗示がちりばめられている書のことである。その意味で本書はまさに古典である。

本書第二部の祭式の記述と解釈で著者は、神性や神霊に対して祈願を唱えること、供儀をすることが、その場で唱えられたとおりに、また供儀獣が屠られる様式どおりに経験が創り生み出されることであると述べているが、それは単なる象徴論を越えて、著者と同時代の言語哲学者であるジョン・オースティンによる行為遂行的発言の分析に通ずるものがあり、言葉と行為の理解に新たな局面を拓くものになっている。

本書のキーワードの一つがパッシオネスである。神霊に憑依され常軌を逸したり病気になった人のために、供儀が行われる例が本書で紹介されている。トランス状態になる・病気になるなど苦難を被るという受動的経験がパッシオネスである。それが供儀をするという能動的行為（アクチオネス）を生み出すことになる。しかし能動的行為は再帰的なもので当事者だけでなく集団全体をも巻き込み決して個人的なものにとどまらない。この議論は、西欧的な個の能動性を前提とせず能動の前にまず受動を想定するという点で、近年人口に膾炙するエージェンシー論やアクターネットワーク論を既に越えた洞察ともなっている。

また牛の模倣の名前にはどのようなディンカの思考の展開が見られるのかを丹念に繙いて見せた序論は、今でも余人の追隨を許すところではない。

本書を監訳しながら、私は国文学者西郷信綱氏の『古事記の世界』（岩波書店、1967年）『古代人と夢』（平凡社、1972年）や大岡信氏の『うたげと孤心』（集英社、1978年）にも通じるが多々あるようにも思われた。その点でも本書がより多くの人に繙かれることを願っている。



本学教員が関わった本

## 地域協働による高校魅力化ガイド：社会に開かれた学校をつくる

地域・教育魅力化プラットフォーム 編  
岩波書店、2019年6月

紹介者

中 村 伶 詞  
(教育学研究科 准教授)

教育は誰のためにあるのだろうか。私が「教育魅力化」という言葉に出会ったのは7年前。隠岐島前高校に赴任した時だった。最初の教員研修で「教育は生徒と地域を自立させるためにあります。この島ではそのような教育を目指しています」と説明され、言葉にならないしこりが胸に残った。当初は「生徒を地域に縛り付けるために教育を利用するなんて許せない。自分は島前地域のために利用されているのか」という怒りすら感じていた。

しかし、5年間島前高校に勤務し、地域と協働して教育活動を実践した今は、怒りどころか感謝すらしている。中学校までいじめられていて不登校だった生徒がイキイキと学校に通い、周囲が舌を巻くようなプレゼンが出来るようになったり、他者との協働が苦手だった生徒が周囲を巻

き込んで自分たちのプロジェクトを実現させたり、多くの生徒の成長に会い、魂を揺さぶられてきた。このような生徒の変容や成長は、奇跡のように思われるかもしれない。しかし、「教育魅力化」に取り組んでいる学校ではいくつもこのような事例が見られる。

「教育魅力化」とは何なのか。「教育魅力化」という言葉が徐々に市民権を得てきているが、この問いに定まった答えはない。地域ごとにどんな生徒を育てたいのか、どんな学校でありたいのか、互いに意見を出し合い、対話を重ね協働しながら紡いでいくプロセスこそが教育の魅力化である。約10年前に隠岐島前高校で始まった高校魅力化プロジェクトがその始まりになる。地域と共にあゆみ、地域と共に創る学校を目指し、学校

全体のグランドデザインや育てたい生徒像を地域と共につくった。それに合わせて次々と教育改革を進めていき、カリキュラムも再編成した。本土からフェリーで3時間以上も要する日本海の離島であるにもかかわらず、全国から入学希望者が集まり、生徒数はV字回復。クラス数も1学年1クラスから2クラスへと増え、教員数も倍以上になった。離島の奇跡として多くのメディアに取り上げられ、「成功モデル」として多くの視察団が現在も訪れている(ただし、島前地域は自分たちのことを成功モデルではなく「挑戦モデル」と捉えている)。魅力化の流れは全国の人口減少地域を中心に広がっていき、大きな成果をあげる学校が複数出てきた。

一方で、それに伴って聞こえ始めたことがある。「あの地域(学校)にはあの人がいるから。うちでは無理。」「事例を学んで真似たはずなのになぜ上手くいかないのか」といった声である。更に、「魅力化とは生徒募集をすること」「魅力化とは行政が教育に予算をつけること」と、魅力化の取り組みを一部だけ切り取った誤解や曲解も流布している。

「教育魅力化」の取り組みは、特定地域の特殊事例ととられる向きも

ある。しかし、全国でいくつもの魅力的な学校が生まれていることから分かる通り、これは一過性の特殊な出来事ではない。また、表面的な政策や制度だけ真似をしても成し遂げられるものでもない。成果を出している地域や学校は、現在までに膨大な挑戦と失敗、成功と挫折を経験し、紆余曲折を経るプロセスの中で「教育魅力化」を前進させてきた。本書は「教育魅力化」に挑戦するプロセスの中で蓄積してきた知見を記したものである。

平成30年に高校の新学習指導要領が告示された。その中で書かれている「社会に開かれた教育課程」では地域と学校でどのような社会を形成したいのかを共有し、そのような地域社会を実現し、担っていくために必要な資質能力を明確した上で、生徒を育てるための教育課程を地域と学校が協働して実現していくように書かれている。「教育魅力化」で目指すものと重なるところが大きい。そのため、本書は「社会に開かれた教育課程」を実現するうえでも示唆に富む。

本書は全5部で構成されており、まず、第1部では高校魅力化とは何か、何故今魅力化なのか、どのように地域と協働するのかを扱う。第2



部では学校を地域・社会に開く意義を述べたうえで、地域のキーパーソンたちとどのように繋がって協働していくのか、地域と学校を接続するキーパーソンである「コーディネーター」について述べる。第3部では、地域社会に開かれた学びをいかに実現させるかを扱い、カリキュラムの編成、教科ごとの実践、部活動や個人プロジェクトの探究などの課外活動に至るまで、理念を具現化した学

びの在り方を述べる。第4部では、越境的な学びや多様性を生む仕掛けとしての「地域未来留学」を紹介し、第5部では「教育魅力化」という動きをどう評価して次に繋げていくかを述べる。

地域と連携することが目的化し、多忙感を増す原因になっている学校も全国に多くある。本書がそのような人たちにとっての道しるべになることを願う。





本学教員が関わった本

## 新版 よくわかる地域福祉

上野谷 加代子ほか 編著  
ミネルヴァ書房、2019年4月

紹介者

佐藤 桃子  
(人間科学部 講師)

「地域ってジャーゴンですよね」と、ある人に言われてハッとしたことがある。自分はもうすっかり社会福祉の言語に慣れて分からなくなっていたのだ、と思った。住み慣れた地域での支援、地域にある資源、地域のボランティア団体……など、社会福祉や公共サービスに関係している分野では、ある一定の共通理解を得ている（と期待している）のが「地域」という言葉である。しかし、誰もが「地域」に住み、「地域」に慣れ親しんでいるはずだが、人によってそこから思い浮かべるものは異なるだろう。

それゆえ、本書のテーマである「地域福祉」とは、福祉のなかでも分かりにくい概念である。福祉といえば高齢者、障害者、生活困窮など、「特別な」対象のための専門的なサービスというイメージがあるため、地域

福祉と聞くと「地域って何？ 福祉って何？」と、それらの言葉に対する理解を揺るがされる気がする。地域福祉とは、上記のような「対象者別の」福祉とは異なり、地域生活のなかで行われる福祉活動全般を指す。そしてそれらの福祉活動は、福祉専門職が担うものとは限らない。

本書の編者でもある上野谷加代子教授は、最初の項目（I-1地域福祉という考え方）のなかで地域福祉について「生活のなかで助けたり助けられたりする経験を「助けあう」という相互の関係まで高め合うしくみ」（p.2）という言葉で表現している。つまり、地域に生活している私たちは、気付かないうちに地域福祉活動によって助けられたり、助けたりするしくみの中に生きている。福祉に関係する専門職でなくても、私たちは住んでいる地域での<sup>くらし</sup>生活を支

える地域住民のひとりとして、地域福祉の一部を担っている。

この助け合うしくみは、1960年代以降の日本で、地域福祉の理論としてさまざまな研究者により理論化が試みられた。1970年『地域福祉研究』、1974年『地域福祉論』を著した岡村重夫をはじめ、各論者によってその概念が検討され、整理されてきた。また、時代ごとに異なる社会背景や情勢、地域の課題に対して、地域福祉はその都度役割を少しずつ変えていくが、地域福祉の原則が「住民主体」であることには変わらない。本書ではその多義的な地域福祉について、多方面から、それぞれの分野の著者によって丁寧に読み解いていく。

2019年に出版された本書は書名に『新版よくわかる地域福祉』とあるとおり、2004年に初版が発行された前著『よくわかる地域福祉』を全面改訂したものである。これは、社会状況の変化に合わせて地域福祉に求められるものや役割が大きく変わりつつあることを表している。新版では「子どもと地域福祉」と「災害と地域福祉」という前著になかった新しい章が立てられた。私たちが地域で生活する中で「助け合うしくみ」を必要とする顕著な例が、子育てと

災害という場面なのである。I-4では、公民館を拠点とした地域組織化の事例として、元松江市社会福祉協議会の事務局長を務めた須田敬一氏が松江市について執筆している(p.10-11)。松江市では、社会教育の役割を持つ公民館と地区社会福祉協議会が一体的に地域福祉を推進する役割を担っており、地域住民がそれぞれの地域の公民館を拠点にさまざまな地域福祉活動を生み出してきた。住民主体のしくみを作り上げてきた例である。

私は「子どもと地域福祉」の中の、子育て支援、社会的養護、子どもの居場所の項目の執筆を担当した。執筆する中で、「地域福祉が何なのか」という問いには一言で答えられないなと思いつつも、子どもたちは地域社会でいろいろな大人と関わりながら育つものであることを改めて確認した。子どもに地域福祉によるさまざまな活動や支援が届かないということは、子育て世帯が地域で孤立してしまうことを意味する。子育て世帯が「助け合い」のしくみの中に入れなければ、貧困や養育困難などの問題が地域ですくい上げられないまま、虐待という形で表面化することもある。

福祉なんて自分には関係ない、と

思う人にこそ、「地域福祉」という考え方に触れてほしい。たとえば本書の中では、「地域福祉の推進主体」として専門職であるコミュニティ・ソーシャルワーカーや社会福祉協議会などと同時に、社会的企業（Social Enterprise）や生活協同組合・農業協同組合などの項目も立てられている。福祉という言葉がついていなく

ても、地域社会で経済活動をする主体は地域福祉の担い手になる。もちろん自治会・町内会やボランティア組織、当事者組織も地域福祉の担い手である。地域に暮らす上で社会関係を作らないと人は生きていけない。であればだれでも、この「助け合い」のしくみの一部なのである。





本学教員が関わった本

## 総合英語： 医療従事者として最も大切なこと

Douglas Paauw 著/岩田 淳ほか 編著  
三修社、2019年2月

紹介者

岩 田 淳  
(医学部 教授)

本書『医療従事者として最も大切なこと』（英題：What Matters Most? Stories that tell the heart of medical professionals）は、鳥根大学医学部の教員が、医学部と教育・研究交流を持つワシントン大学（アメリカ、ワシントン州シアトル市）のダグラス・パウ教授と共著で、日本で医療職を目指す学生を対象とした医学英語の教科書として2019年2月に三修社から出版しました。

本書は、パウ教授が医師としての体験、患者や教え子たちとの交流、家族への思いを綴った15のエッセイを題材として、医学部で医学英語教育を担当している私が中心となって、同じく医学英語教育に携わる玉木祐子嘱託講師（本学外国語教育センター）、マーフィー・リン助教（本学医学部医学科医学英語教育学講座）とともに、日本で医療職を目指

す学生の医学英語の学習に役立てることを目的に、医学分野の専門的な語彙力、読解力、表現力が身につくよう教科書のスタイルに編集したものです。



本書と付属音声CD

本教科書用のエッセイを執筆したパウ教授は、ワシントン大学医学部総合内科学講座の教授として、診療や研究だけでなく、医学部臨床教育プログラムのディレクターとして医学教育に長年携わってこられました。その医学教育や医学生のキャリ

ア支援における功績は高く評価され、ワシントン大学医学部のベストティーチャー賞を何度も受賞されています。また、日本語をはじめ4ヶ国語に翻訳され世界中の医学生に愛読されている『内科クラークシップガイド』（英題：Internal Medicine Clerkship Guide）やエイズの治療に関する専門書を数多く出版されています。本学医学部とパウ教授は、平成25年2月に初めて招聘して以来教育・研究交流を続け、毎年本学部にて様々な教育、研究に関するセミナーを実施いただいています。また、双方で医学生を派遣し、臨床実習の機会を設けるなど、積極的な学生交流も進めています。

今回、中心となって編著を行った私とパウ教授とは、パウ教授の初めての訪問時に医学英語の授業で講演を依頼したことをきっかけに交流を始めました。パウ教授がエッセイを書くのが趣味だと知った私が、医学英語の教材用にエッセイを利用させていただきたいと申し出たところ、快諾いただき、以降、医療職を目指す学生を対象とした教科書の形になるよう、私が中心となってパウ教授や編著者の協力を得ながら、英文のリライト、語彙・読解問題の作成、関連する英文の選定等の編集を行っ

てきました。編集においては、医学英語の基礎力、応用力の養成と、医学のジャンル特有の専門用語や内容をバランスよく学べるよう配慮しました。

4年前から国内の出版社に企画を持ち込み、2年前に大手大学教科書会社三修社が企画の採用を決定してからは、推敲を重ね、小テスト問題作成、教員用マニュアルの作成、音声のレコーディング等を経て、構想開始から6年の月日を経て、昨年2月に教科書として出版されました。

本書は、昨春より、国内8つの医療、看護、福祉系の大学、専門学校で医学英語の教科書として採用いただき、昨秋には増刷され、2020年度にむけ更に多くの大学、専門学校で利用される予定です。

本書が、医療職を目指す学生の英語力の向上に役立つとともに、医療職というキャリアについて深く考



著者・編著者らの写真：右から岩田、パウ、玉木、櫻井、マーフィ（敬称略）

え、患者、同僚、家族との信頼関係を築くきっかけとなればと思います。また、本書は一般の書店でも購入できますので、医療をテーマとし

た英文エッセイ集として一般の読者の方々にも読んでいただけると嬉しく思います。







本学教員が関わった本

## p進ゼータ関数：久保田－レオポルドから岩澤理論へ

青木 美穂 著  
日本評論社、2019年2月

紹介者

青木 美穂  
(総合理工学部 教授)

本のタイトルの“p”は“prime number”（素数）を表します。私の専門分野である数論の研究者は論文や講演などで“p”という文字を“一般的な素数”という意味で用いる慣習があります。素数とは何でしょうか？ それは約数をちょうど2個（1とそれ自身）もつ自然数で、小さい順に2, 3, 5, 7, ……と続きます。数論の歴史はこの“素数”とともに刻まれてきました。紀元前3世紀にはユークリッドにより“素数”は無限個存在することが証明されていますが、素数の並びに規則性は見つかっておらず、そのことを利用し、“大きい素数”は現代では情報を安全にやりとりする“鍵”の役目を果たしています（RSA暗号）。最近では2年ごとぐらいの間隔で新しい素数が発見されていて、現在知られている最も大きい素数は

“ $2^{82589933}-1$ ”です（2018年12月に Patrick Laroche により発見）。

素数pを1つ選ぶと、それに応じて有理数の間に“距離”が定義できます。3つの自然数1, 7, 19を数直線上に並べたとき、 $7-1=6$ 、 $19-1=18$ なので、19よりも7の方が1に近い場所にありますが、素数pによって決まる“距離”は、pで沢山割れるほど近くなります。例えば  $p=3$  によって決まる距離を考えると、6は3で1回しか割れませんが18は2回割れるので、7より19の方が1に近くなります。このように素数pによって決まる距離を“p進距離”と呼んでいます。

有理数から実数を作る方法が“完備化”です。これは“隣り合う数の距離がどんどん近くなっていく有理数列を一つの実数だと思ふ”ということです。たとえば円周率 $\pi$ の小

数第  $n$  位以下を切り捨てた有理数を  $a_n$  とおくと、次のような有理数の無限数列ができます。

$$a_1=3, a_2=3.1, a_3=3.14, \\ a_4=3.141, \dots$$

“完備化”はこの数列を円周率  $\pi$  と同一視するということです。“ $p$  進距離”に対しても同様に有理数を“完備化”することができます。有理数の無限数列

$$a_1=1, a_2=1+3, a_3=1+3+3^2, \\ a_4=1+3+3^2+3^3, \dots$$

は 3 進距離で考えると隣り合う数の距離がどんどん近くなっている（ $a_2-a_1$  は 3 で 1 回割れる、 $a_3-a_2$  は 3 で 2 回割れる、……）完備化によってこの数列を 1 つの数だと思ふような“3 進世界”が構成できます。“ $p$  進ゼータ関数”は通常の世界（実数世界）で定義されるゼータ関数から作られる“ $p$  進世界”のゼータ関数です。実数上定義される最も有名なゼータ関数は次の“リーマンのゼータ関数”です。

$$\zeta(s) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^s} = \frac{1}{1^s} + \frac{1}{2^s} + \frac{1}{3^s} + \dots$$

1 より大きい実数  $s$  に対し上の無限和は収束します。この関数は解析接続という方法を用いると、任意の複素数  $s$  に対し意味をもつように定義域を拡張することができます。数学

で最も重要な予想であるリーマン予想 (Riemann hypothesis) は、解析接続された“リーマンのゼータ関数”の非自明な零点が 1 直線上に並ぶという主張で 1859 年にベルンハルト・リーマンによって提示されてから現在も未解決であり、解決の糸口すら見つかっていない超難問として知られています。解析接続されたリーマンのゼータ関数の負の整数での値は有理数になり、和算家の創始者として知られる関孝和とスイスのヤコブ・ベルヌーイによって発見された漸化式：

$$\sum_{k=0}^n \binom{n+1}{k} B_k = n+1 \quad (n=0,1,2,\dots)$$

( $\binom{n+1}{k}$  は二項係数) で定義される“関・ベルヌーイ数”とよばれる数列  $B_n$  で次のように表すことができます。

$$\zeta(1-n) = -\frac{B_n}{n} \quad (n=1, 2, 3, \dots)$$

$$B_0=1, \quad B_1=\frac{1}{2}, \quad B_2=\frac{1}{6}, \quad B_3=0,$$

$$B_4=-\frac{1}{30}, \dots$$

ベルヌーイ数には素数  $p$  ごとに不思議な性質があることが 19 世紀にエルンスト・クンマーによって発見されていて、 $p$  進ゼータ関数はベルヌーイ数の  $p$  進的な性質を用いて構成さ

れます。このような実数世界で定義されるゼータ関数から久保田富雄とハインリッヒ・ヴォルフガング・レオポイドは1964年に $p$ 進世界のゼータ関数を発見しました。本書は $p$ 進ゼータ関数の久保田－レオポルドによるオリジナルの構成方法と $p$ 進測度を用いた現代的構成方法について解説しています。

久保田－レオポルドによって構成された $p$ 進ゼータ関数は単に実数世界でのゼータ関数の類似というだけでなく、その後の数論研究において“ $p$ 進”という手法の重要性を定着させる大きな役割を果たしていきま

究されてきましたが、実数世界の関数から構成された $p$ 進ゼータ関数は代数的整数論の研究対象と結びつきやすいことが岩澤健吉によって発見され、岩澤理論と呼ばれる大きな理論構築につながっていきます。

本書を執筆していたとき、名城大学で行われたセミナーで久保田富雄先生の講演を拝聴することができました。数論の歴史に大きな変化をもたらすような仕事をされた大数学者の講演を聞くことは、 $p$ 進ゼータ関数が発見されてから僅か50年しか経っていないことを実感させられる機会でもありました。数学者が紡ぐ業績が次世代に受け継がれていくことを実感しながら、また各時代の研究者に敬意と畏れを抱きながら本書を書き上げました。





## 書評

ナショナル・アイデンティティを  
問い直す

川田 順造 編  
山川出版社、2017年10月

紹介者

出口 顯  
(法文学部 教授)

イスラエルの生殖医療を故あって調べたことがある。いうまでもなくイスラエルは19世紀後半に起こったユダヤ人の民族主義運動シオニズムに立脚した国であり、第二次世界大戦後の1948年に建国された。世界中に散らばっていたユダヤ人たち（ディアスポラ）の「われわれユダヤ人は固有の国家をもたねばならない」という悲願は達成されたともいえるが、その後も周辺アラブ諸国との間に戦闘が絶えない。また第二次世界大戦中のナチスドイツによるホロコーストの記憶が深く刻み込まれているため民族の血を絶やさないことは国民にとって義務だと捉えられている。従って不妊のカップルでもシングルの女性でもイスラエル国民を再生産できるように、体外受精を保険でカバーできるようにしているだけでなく、欧米では禁止されたり

規制される生殖医療も積極的に奨励されている。例えば1996年には世界でいち早く商業的な代理出産を法的に認め、2003年には司法長官の指針により死後生殖（人の死後その配偶子〔精子あるいは卵子〕を採取・凍結保存して子どもをつくること）も認められている。

つまりイスラエルとは、極めて近代的なナショナリズムの産物であり、生殖医療もその枠組みの中でとらえることも可能である。

しかしそれがすべてなのではない。旧約聖書の「申命記」25章には、妻のある男が死んで子のない時は、兄弟がその男の妻をめとり、その女が初めに産む男の子に死者の名を継がせなければならないという記述がある。これはレヴィレート婚と呼ばれ、今日実践されることはほとんどないにしてもユダヤの戒律において

重要視され、国家としてのイスラエルの政策にも影響を与えている。死後生殖はレヴィレート婚の目ざすところを可能にする。代理出産も同様である。「創世記」16章にはアブラハムの妻サライが不妊故につかえめのハガルに、「創世記」30章ではヤコブの不妊の妻ラケルがつかえめのビルハに夫の子どもを産ませている。現代の代理母は依頼人の夫と実際に性交渉して妊娠するわけではないが、彼女たちはハガルやビルハの末裔なのである。

つまり生殖医療におけるイスラエルのナショナリズムを理解しようとするなら、近代に焦点をあてるだけでは不十分であり、より大きな歴史の流れの中で捉えることが必要になってくる。

そしてこのような事態は移民国家イスラエルに限ったことではないことを『ナショナルアイデンティティを問い直す』は教えてくれる。「序なぜナショナルアイデンティティの国家比較か」と「時間軸と空間軸の対比から」の中で編者の川田順造は、国民国家が生まれた歴史的経緯から説き起こし、nationという言葉の変遷にも配慮しながら、16世紀と19世紀という二つの世紀の中で西洋が進出したアジアとアフリカとい

う二つの地域を比較しその中で日本の近代化を再考する。この考察の中で興味深いのは「江戸市中を混乱に陥れたテロ行為である」はずの赤穂浪士の討ち入りが明治天皇によって顕彰され近代日本の忠君愛国の鑑とされたという解釈である。建武の新政の楠木正成が忠臣として神格化されたと同様、過去が再利用（川田の言葉で言えば再創出）されていく過程が明らかにされる。過去の再創出や発明された復古という表現は、ホブズボームとレンジャーの「伝統の発明」を連想させるが、川田の立場は、ヴィーコに言及しながら、人類史の各時代はその時代のモデルとなる先行する時代を再現するというレヴィ＝ストロースの論を彷彿させる（『われらみな食人種』創元社）。近代とそれ以前の断絶よりも、むしろ歴史の連続性や循環に目配せすることが、近代国民国家としての日本を考える上で見落とすべきではないことを読者は気づかされる。

この壮大な川田の構想のもとで、東南アジア（インドネシア、ミャンマー、ベトナム、フィリピン）、東アジア（シベリア先住民、義和団の乱の中国、韓国朝鮮、大東亜共栄圏という構想）、アフリカ（セネガルと南スーダン）、イスラームのナシヨ

ナリズムやその超克の動きなどが、周辺諸国との関係も視野に収めながら、実に多様に論じられる。歴史学者や人類学者・政治学者などによる論考はいずれも経験的実証的で、グローバル化が加速化する中でそれに反発するかのようなナショナリズムの動きも強くなっている現状を冷静に見極めるために、本書は有益である。

ナショナリズムや国民国家を論ずるときの必読文献とされるベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』やアーネスト・ゲルナーの『民

族とナショナリズム』だけを繙きナショナリズム一般の特徴を抽象的に口にしておけばすむといった事態ではもはやないのだ。

イスラエルのことから書き出したが、イスラエルの国民すべてがユダヤ人ではない。900万近い人口の2割強はアラブ系である。彼らはガザ地区やヨルダン川西岸ではなく、イスラエル内に居住している。しばしば二級市民的な扱いを受けていると言われる彼らのことをどのように考えればよいのか。本書はこの点でも示唆を与えてくれる。



## 原稿募集

### —『淞雲』原稿執筆の手引き—

#### 1 編集方針

本誌は、島根大学附属図書館が編集・発行する雑誌です。本誌は、島根大学附属図書館の利用者である学生及び教職員を主な対象読者として、大学図書館及び図書館資料についての調査・研究成果や附属図書館の活動報告、資料紹介等を掲載します。学生や教職員の皆様からの投稿も広く受け付けます。

#### 2 投稿規定

##### (1) 原稿の種類

島根大学附属図書館及び大学図書館、公共図書館など図書館に関する内容の調査・研究成果や活動報告、資料紹介等で、次の種類に該当するものとします。

|     |                                        |
|-----|----------------------------------------|
| 論文  | 図書館（資料）に関連するオリジナルの研究論文、講演録             |
| 報告  | 図書館業務・サービスに関連する報告、図書館資料に関連する報告（資料紹介など） |
| 短報  | 本学教員自著紹介、書評、図書館に関連するショートエッセイ           |
| その他 | 館長が必要と認めるもの                            |

##### (2) 原稿の提出・問い合わせ先

電子メール本文に以下の必要事項を明記のうえ、次の提出先に提出してください。

##### ・必要事項

- ①投稿希望（論文・報告・短報・その他 のいずれかを選択してください）
- ②投稿者所属および氏名
- ③論題（縦書き・横書き のいずれかを選択してください）

##### ・提出先

島根大学附属図書館広報チーム（『淞雲』編集委員会）

e-mail: library@lib.shimane-u.ac.jp

TEL : 0852-32-6088 (内線) 2780

(3) 原稿の査読

本誌に掲載する記事は、内容に応じて編集委員会または、編集委員会が依頼する査読者による査読を行い、査読結果に応じて、著者に対して、原稿の修正、改善をお願いすることがあります。

(4) 著作権

本誌に掲載された記事の著作権は、著者に帰属します。ただし、本誌は冊子で発行するとともに電子版を公開するため、事前に電子化に伴う複製及び送信可能化並びに公衆送信を許諾していただきます。

(5) 校正

初校のみ著者校正をお願いします。

(6) 学術情報リポジトリSWANへの掲載

掲載された記事は、島根大学学術情報リポジトリSWANへ掲載し、インターネット上に公開します。

(7) 掲載原稿の取扱い

提出された原稿は、原則として返却しません。

(8) 謝礼

執筆者1名につき、掲載号1部ご希望により別刷り10部まで贈呈します。

### 3 原稿執筆要領

(1) 原稿の形式

原稿の本文はテキスト形式またはMS-Word形式とします。

(2) 原稿の長さ

本文の長さは、記事種別に応じて、概ね次のページ数(図表、写真含む)に収まるようにしてください。

横書き：A4判 1ページあたり34文字×31行(1,054文字)

縦書き：A4判 1ページあたり25文字×20行×2段(1,000文字)

\*刷り上がりはA5判となります。

論文・報告 4～20ページ以内



短報 2 ページ (短報の刷り上がりは横書き 2 段組になります)

(3) 原稿の書き方

- ①文章はわかりやすく、冗長にならないよう簡潔に表現してください。
- ②文章は「である」調、「です・ます」調のいずれでも可とします。内容にふさわしい文体としてください。
- ③章・節・項などの見出しをつける場合は、原則としてポイント・システムを使用してください。

例) 第 1 章 → 1

第 1 章, 第 1 節 → 1.1

第 1 章, 第 1 節, 第 1 項 → 1.1.1

項以下の細分 → (1)

- ④写真、図、表には、例のようにそれぞれ一連番号と簡潔なタイトルを付し、本文中に挿入するか、または、挿入箇所を明示して、別ファイルとしてください。本文中に図、表を挿入する場合においても、図、表は本文とは別ファイルとしてください。

例) 図 1 システム概要

表 1 メタデータ項目一覧

- ⑤文献を参照または引用した場合は、本文の該当箇所の右肩に、1), 2), 3) …のように一連番号を付して、本文末尾に参考文献・引用文献の書誌事項を記載してください。記載方法は、「科学技術情報流通技術基準 (SIST)」(URL <http://jipsti.jst.go.jp/sist/index.html>) などを参照してください。
- ⑥他の著作物から転載する場合、及び図 (写真を含む)、表を使用する場合は、事前に著作権者の許諾をとって下さい。

2020.2 改訂

代式百貫

アリ<sup>朱字</sup>

一金紋俱利伽羅龍御三所物一通

作壽乘

地板赤銅魚々子裏哺金

光孝極

代金七枚

アリ<sup>朱字</sup>

一金紋俱利伽羅龍御三所物一通

作光孝

地板赤銅魚々子裏哺金<sup>九千才</sup>

自身彫附

外一金貝之落紙包有之<sup>※上から紙を貼られている</sup>

以上

アリ 朱字

一

金紋俱利伽羅龍御三所物壹通

作榮乘

地板赤銅魚々子裏哺金

光孝極

代貳百貫

アリ 朱字

一

金紋俱利伽羅龍御三所物壹通

作顯乘

自身彫付

金無垢地水

光孝極

代貳百五拾貫

アリ 朱字

一

金紋俱利伽羅龍御三所物壹通

作即乘

光孝彫付

棹下地 通乘

地板赤銅魚々子裏哺金

光理極

代貳百貫

アリ ハ丁オ 朱字

一

金紋俱利伽羅龍御三所物一通

作程乘

地板赤銅魚々子裏哺金

光孝極

代百五拾貫

※墨字による注記  
此御三所物十六番宗光小刀ニ掛居候処此度宗光則景御大

小御拵直シニ相成候ニ付此三所物之内御目貫御小刀柄斗

り則景御脇指ニ掛り御筭ハ此所江入置 天保十五甲辰年

七月十一日改之節記置

御筭斗 朱字

一 金紋俱利伽羅龍御三所物一通

作廉乘

※貼り紙に朱字  
此分御筭斗り有之歟重而吟味ノ事

棹下地金哺地魚々子

光孝極

代百五拾貫

天保五年 朱字

目貫 小柄 即量に懸ル

此御三所物入候箱蓋損シ有之

御小柄 ハ丁ウ 寄墨字による注記

文久元酉年七番彦兵衛祐定御刀ニ懸ル

御目貫・御筭 寄墨字による注記

慶應三卯五月直應様ニ被進御大小ニ

御掛ニ相成 朱字 傍線あり

ナシ 一 金紋俱利伽羅龍御三所物一通

作通乘

自身彫附

光寿与有之

此度御寄沢ニ相成 朱字 見せ落ち

金無垢魚々子

光孝極

中六重式並ひ二而拾式箱銘々蓋附各朱塗金粉銘有

十二代証文入箱中蓋金粉銘 九阜文書

中箱木地蠟色金粉銘有真鍮錠前附

外箱鍛白木

御三所物何れ茂表黒天鷲絨裏金摺之切張有之板二附居  
銘々黒天鷲絨蒲団沓摩添

内

アリ 一 金紋俱利伽羅龍御三所物沓通

作祐乘

廉乘彫附

棹下地廉乘

地板赤銅魚々子裏哺金

光理極

代千貫

此分内外朱塗蓋金粉銘中箱二入居

右同様之中空箱沓ツ

蓋二金粉銘

乘真作

総金龍三所物二十四疋有之

安行御短刀二掛

酒井様へ参りナシ

○ 一 金紋俱利伽羅龍御三所物沓通

作宗乘

金無垢地水

光孝極

代金二拾枚

アリ 一 金紋俱利伽羅龍御三所物沓通

作乘真

御小刀柄斗

光孝彫附

外二乘真之カウヒ沓アリ

地板赤銅魚々子裏哺金棹下地後

光孝極

代三百貫

酒井左衛門尉殿江 治郷公ヨリヒクサタ御茶入ト御替ニ

相成候由酒井公受証ニ有之 明治十六年十月記之

ナシ 一 金紋俱利伽羅龍御三所物沓通 作光乘

アリ 一 金紋俱利伽羅龍御三所物沓通 作徳乘

御小刀柄斗

光壽彫附

地板赤銅魚々子裏哺金

光理極

代三百貫

三丁ウ  
一 金紋這龍御三所物沓通

作即乘

自身彫附

光重与有之

光孝極

代式百貫

御目貫斗光重御小サ刀ニ掛

一 金紋這龍御三所物沓通

作壽乘

自身彫附

光理与有之

光孝極

地板赤銅魚々子裏哺金

代百貫

朱字  
右朱書ニ同シ  
※村上由あり

○朱字 傍線あり  
一 金紋這龍御三所物沓通

作程乘

※墨字による注記  
壽乘御目貫以前斗光重御小サ刀ニ掛居候処此度両山 御  
参詣之節御指被遊旨被 仰出候ニ付御小柄御筭も光重掛  
ル 天保十一庚子年五月十七日

御讓之節今無之

一 金紋這龍御三所物沓通

四丁オ  
地板赤銅魚々子裏哺金棹下地後

作廉乘

光孝極

代金六枚

四丁ウ 朱字  
右朱書ニ同シ  
※村上由あり

○朱字 傍線あり  
一 金紋這龍御三所物沓通

作光孝

御讓之節今無之

一 金紋這龍御三所物沓通

作通乘

自身彫附

光寿与有之

光理極

代百貫

五丁オ  
一 金銀砂子研出シ小口几帳面共金粉裏朱塗八重組御三  
所物箱

蓋裏金粉銘

銘後藤四郎兵衛光孝書

袋金入緞子之類歟裏御納戸海氣歟緒つより茶

一 金紋這龍御三所物壱通

作祐乘

御筭後藤政光彫附棹榮乘下地程乘  
地板赤銅魚々子裏哺金

光孝極

廉乘彫附

代式捨枚

棹 程乘

下地 廉乘

三才文政八才四十月無銘十三番則光御小サ刀二御用二相成

地板赤銅魚々子裏哺金

光理極

一金紋這龍御三所物壱通

作德乘

代千貫

地板赤銅魚々子裏哺金棹下地後

光孝極

一 金紋這龍御三所物壱通

作宗乘

代二百五拾貫

光孝彫附

地板赤銅魚々子裏哺金棹下地後

光孝極

八拾式番兼光御小サ刀二掛

代二百五拾貫

一金紋這龍御三所物壱通

作榮乘

地板赤銅魚々子裏哺金

光理極

二丁一 金紋這龍御三所物壱通

作乘真

代式百貫

光孝彫附

地板赤銅魚々子裏哺金

光孝極

代三百貫

朱字年号不知四月十四日酒井左衛門尉殿へ治郷公ヨリヒクサ  
夕御茶入卜御替物二相成候由酒井公御受証も有之 明治  
十六年十月記 ※村印あり 之一 金紋這龍御三所物壱通

作光乘

○ 朱字 傍線あり 一 金紋這龍御三所物壱通

作顯乘

御小刀柄光孝彫附

御讓之節より無之

を加えた箇所もある。

一、本文の文字サイズは同一とした。

一、頁の変わり目に、丁数と表裏を「一丁オ」のように小字で右側に付した。

一、適宜、米印（※）を付して注記した。

〔付記〕

元となる翻刻は佐藤陽子（島根大学企画部図書情報課）が担当し、小林准士（島根大学法文学部）が監修した。

〔謝辞〕

本史料の翻刻についてご許可いただいた月照寺様にこの場を借りて御礼申し上げます。

なお、当翻刻は、二〇一九年度法文学部山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（代表・野本瑠美）による研究成果の一部である。

〔翻刻〕

表紙  
御腰物御小道具帳

奥御納戸

○朱字印御仕立御寄訳御譲被進等二相成此内ニ無之分

○朱字  
一<sub>二丁オ</sub> 朱塗静海波沈金彫内黒塗御三所物箱

指蓋并後之刀七宝透し

蓋裏金粉銘 銘後藤四郎兵衛光孝書

塗温故張寛武永作

袋雲龍紋錦恵花色海気緒つかり藍天鷲絨

御引出シ拾三銘々蓋附

蓋之甲中之処黒塗各金粉銘有蓋裏

黒テウ黒天鷲絨張金溜塗四歩一付黒塗落シ蓋有

中箱桑金粉銘有銅錠前金物付

外箱榎白木

御三所物何れ茂表猩々緋裏金摺之切張有之板ニ

付居

内<sub>二丁オ</sub>

帳」所載品で前述の但し書きがない名を比較するとほぼ一致する。

曖昧な点が残るのは、廉乗作の金紋俱利伽羅龍についてである。「御腰物御小道具帳」八丁表には、天保一五（二八四四）年の書入れで「此三所物之内御目貫御小刀柄斗り則景御脇指二掛り御筭ハ此所江入置」とあり、三所物のうち、目貫と小柄（小刀柄と同義）はなく、筭のみ残っていることが分かる。しかし、同頁には貼紙もあり、そこには朱字で、「此分御筭斗り有之歟重而吟味ノ事」とあるため、筭がどこかの時点で紛失したか、本来収められているものとは異なる品ではとの疑義が生じたことが想像される。

しかし、他の刀装具の金工師名は一致するため、『金工鑑定秘訣』の書入れに記された松平家は旧松江藩主家の当主松平直亮家のことと十分推測できる。

#### 〔凡例〕

一、本稿は、月照寺所蔵文書四二『御腰物御小道具帳』を部分的に翻刻したものである。月照寺所蔵文書の目録は、松江市教育委員会編『乙部家等古文書史料調査目

録』（松江市文書調査報告書第一集、二〇一〇年）に掲載されている。同書によると、「御腰物御小道具帳」を含む旧藩主関係の文書は松平直亮が寄進したと伝わっている。

一、史料の翻刻にあたっては、原則として旧字体を新字体に改めた。

一、異体字・俗字・略字・合字のうち、より、ならびに、ばかり、斗、メについてはそのままとした。

一、変体仮名は現行の字体に改めたが、助詞等に用いられる与・江・而・茂・歟についてはそのままとした。

一、抹消されている箇所は、見せ落消ちと右側に付した。

一、朱字による書入れは、朱字と右側に付した。朱字による傍線も付されている場合は、「朱字 傍線あり」とした。

一、原文で魚編に内の漢字がある。これは下に子を付してナナコと読み、刀装具によく用いられる彫金技法を示す。該当の漢字が表示されないため、便宜上、現在使用される「魚々子」で代用する。

一、原文の改行は、必要と認めた場合以外は追い込みとした。読者の便をはかるため、本文に改行や並列（・）



# 「御腰物御小道具帳」翻刻（部分）

島根大学企画部図書情報課 佐藤 陽子  
島根大学法文学部 小林 准士

本号掲載の「桑原文庫に見る桑原羊次郎の刀装具研究」に関連し、松江藩主松平家初代から九代の廟墓がある月照寺（島根県松江市）蔵「御腰物御小道具帳」の表紙から九丁表までを翻刻した。

島根大学附属図書館蔵桑原文庫の『金工鑑定秘訣』には、松平家が所持していた後藤一門の刀装具「金紋俱利伽羅龍三処揃 裏哺金」と「金紋這龍三処揃 裏哺金」を、一八九八（明治三一）年に桑原羊次郎（前稿参照）が実見した旨の書入れがある。「松平」は徳川幕府の親藩や徳川氏と縁戚の家々等で用いられる名字であり、ここで言及されているのがどの松平家を指すのか当該資料のみでは明瞭ではないため、周辺情報から推察したい。

羊次郎は自身の著作『日本装剣金工史』で旧松江藩主松平定安の三男・松平直亮伯爵所蔵の後藤家の刀装具「這龍三處揃俱利伽羅龍三處揃各十三代」について述べ

ているが、その書きぶりから羊次郎が該当作を実見したことがうかがえるほか、羊次郎が松平直亮家の刀装具を実見できる人脈を持っていたことが分かる。

旧松江藩主家所蔵の刀装具は「御腰物御小道具帳」に記されており、二丁から九丁表に「金紋俱利伽羅龍三処揃 裏哺金」と「金紋這龍三処揃 裏哺金」に相当すると思われる「金紋俱利伽羅龍御三所物」および「金紋這龍御三所物」の記載がある。なお、三処揃と三所物は同義である。

同帳記載品のうち、親族に譲った品や刀剣の拵に使用されることになったものは但し書きがある。但し書きには年が記されている場合もあり、当該箇所については一八八三（明治一六）年が最も新しいため、この前後の時代に旧松江藩主家で所持していた刀装具が記されていると想定できる。羊次郎が『金工鑑定秘訣』に書入れた実見は一八九八（明治三一）年に行われており、仮に一八八三（明治一六）年ごろの資料として実見までに一五年の差があることに留意したい。

さて、『金工鑑定秘訣』書入れに見える俱利伽羅龍三処揃および這龍三処揃の金工師名と、「御腰物御小道具

- 28 村角紀子「桑原羊次郎とその美術工芸研究―附『欧米美術行脚』目次翻刻」『松江市史研究』二〇一八年（九号）、松江市歴史叢書一一）五三頁。
- 29 前掲10 二二五頁、四九八頁。
- 30 刀装具の受取書は、竹中公鑑（一九〇一（明治三四）年受信。島根大学附属図書館蔵桑原文庫「独楽集」第六卷所載）からの書簡に見える。収集品の交換については、山上八郎（一九三二（昭和七）年受信。同第一〇卷所載）に見える。
- 31 野田敬明「編」、高瀬伴寛、野田政明「画」『金工鑑定秘訣』北島長四郎「出版者」、一八二〇年（卷之一）全三七「丁」（島根大学附属図書館蔵桑原文庫）より翻刻。改行等は実資料に即していない。
- 32 「後藤祐乗」『日本大百科全書（ニッポニカ）』JapanKnowledge, <https://japanknowledge.com>（参照二〇二〇年一月二八日）
- 33 筆者は『金工鑑定秘訣』の書入れで言及されている松平家について、旧松江藩主家の当主松平直亮家のことと仮定する。後続の「月照寺蔵「御腰物御小道具帳」翻刻（部分）」参照のこと。
- 34 島根大学附属図書館蔵桑原文庫の「後藤秘傳目貫彫物目利切り抜き」、「後藤彫物口傳内證紀」、「御代々大判御書判御折紙書判御折紙裏印」には羊次郎のものとおぼしき書入れがある。また、同文庫の「後藤銘鑑」は今村長賀から送られた書物だが、本来余白であったと思しき箇所に双蛙追加と書入れのある刀装具の押形が収められており、羊次郎が実見の記録を残そうとした跡が見える。
- 35 前掲10 一八一九頁。旧字体を新字体に改めて引用。
- 36 前掲6

- 四九七頁。
- 11 中央刀剣会の発起人については、「刀剣会発起ノ趣旨」『中央刀剣会』<http://chuo-toukenkaig.org/history>（参照二〇二〇年三月四日）、羊次郎の寄稿先については、前掲9 二〇一―二〇六頁。
- 12 たとえば、小笠原信夫『鐔』保育社、一九七五年（カラブックス三三〇）「三」頁で羊次郎の著作は「鐔を研究するための主な参考図書」として挙げられている。また、市場で言及される例は、「小柄 銘〓如竹（花押）」『刀和』二〇一九年（三七四号）日本刀柴田、一三一―一四頁。
- 13 前掲10 一頁。旧字体を新字体に改めて引用。
- 14 過去帳や墓碑銘の例としては前掲9 八四頁、家々の文書の利用については前掲9 一四七頁、図書館の利用については前掲9 八〇頁。
- 15 前掲10 同頁。
- 16 「伊勢貞丈」市古貞次ほか編『国書人名辞典』岩波書店、一九九三年、一六―一七頁。
- 17 現在、桑原文庫に所蔵されている伊勢貞丈による著作が望月家旧蔵書であることについては、小林准士氏（島根大学法文学部）の調査・御教示による。たとえば、現在桑原文庫にある『刀劔問答』やその附图『刀劔圖』は、伊勢家が所蔵していた資料を望月家五代・望月圓次が書写したものである。
- 18 島根県立図書館郷土資料編集『松江藩列士録（第六巻）』島根県立図書館、二〇〇六年、四一―四二頁によると、望月家は、松江藩主松平家の初代・松平直政以来の藩士である。初代望月角右衛門は三〇石取・五人扶持であったが、その後加増されており、例えば五代・望月圓次は二五〇石となっている。
- 19 前掲5 同頁。
- 20 前掲10 一八一―九頁、四九四頁。
- 21 前掲10 四九四―四九八頁。
- 22 前掲3 一九二―〇六頁、五〇―五二頁。
- 23 前掲10 五〇四―五〇六頁。
- 24 内藤直子「監修・著」、吉原弘道『もっと知りたい刀劔・名刀・刀装具・刀劔書』東京美術、二〇一八年、七二―七五頁。
- 25 「中央刀劔会名簿」『工学と工業』一九四一年（九巻四号）一七七「四二」―一八六「五〇」頁。
- 26 「刀劔会発起ノ趣旨」『中央刀劔会』<http://chuo-toukenkaig.org/history>（参照二〇二〇年三月四日）
- 27 たとえば、後藤丈太郎（一九〇五（明治三八）―一九〇六（明治三九）年頃受信。島根大学附属図書館蔵桑原文庫「独楽集」第六巻所載、本阿弥光質（一九三〇（昭和五）年受信。同第六巻所載）から送られた書簡より、羊次郎が刀装具に関する調査のために各所に問い合わせを行っていたことや、逆に地元の金工師についての問い合わせを受けていることが分かる。

名や刀装具にまつわる知見をまとめた。一九四一（昭和  
一六）年には研究の集大成とも言える『日本装剣金工史』  
を発表し、没後、「装剣具研究では日本一」との評価を  
得ることになる。<sup>36</sup>

なお、羊次郎の研究方法が確定したのはいつからか、  
羊次郎の刀装具研究が肉筆浮世絵等の研究の知見や政  
治・社会活動のなかで得た人脈の影響をどの程度受けて  
いるのか等検討すべき点が多い。今後の課題としたい。

## 付記

資料利用については島根大学附属図書館、月照寺（松江  
市）の多大なご協力を得た。また、調査や本稿執筆中は、  
島根大学法文学部の小林准士様、松江市史料編纂課専門調  
査員の村角紀子様にご貴重なご助言を賜った。皆さ  
まに深く感謝の意を申し上げる。なお、本稿は、二〇一九  
年度法文学部山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴  
史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」（代表・  
野本瑠美）による研究成果の一部である。

## 参考文献と註

1 本稿は、二〇一八（平成三〇）年九月に島根大学附属図  
書館で開催した「生誕一五〇年 桑原羊次郎と桑原文庫」

展解説パネル「桑原羊次郎と刀装具」（筆者担当分）を大  
幅に加筆修正したものである。

2 桑原文庫収蔵品。

3 桑原羊次郎・相見香雨研究会編『桑原羊次郎―郷土のエ  
ンサイクロペディア』松江市歴史まちづくり部史料編纂課、  
二〇一八年（松江市ふるさと文庫二一）、一八頁、五〇―  
五二頁。

4 前掲3 四八―四九頁。

5 若槻虎眠、太田直行、佐々木浩、四方文吉、藤野民次郎、  
皆美興蔵、木幡吹月、岡田秀勝「桑原双蛙先生追悼録」『日  
本美術工芸』一九五五年（二〇六号）五一―六一頁。

6 「座談会 桑原双蛙翁を偲ぶ」『山陰新報』一九五五年  
一〇月二八日付、四面。

7 南明日香『国境を越えた日本美術史―ジャポニスムか  
らジャポノロジーへの交流誌一八八〇―一九二〇』藤原書  
店、二〇一五年、三九頁によると、当時、ジャポニスム  
は欧米を席捲していた。羊次郎の留学先のアメリカでは、  
一八七〇―八〇年代にかけ、新興財閥が世界中の美術品を  
購入し、自宅を飾るようになっていた。

8 『日本刀講座』雄山閣、一九三四年（第八卷）「用語解説（三）  
部」三頁。

9 桑原羊次郎『増補装剣金工談』津久井書店、一九三〇年、  
二〇〇―二〇二頁。

10 桑原羊次郎『日本装剣金工史』荻原星文館、一九四一年、

入れがあり、他資料にも同様のものがある。<sup>34</sup> 書入れから、羊次郎が実見した刀装具をもとに金工師の作品の特徴をとらえ、現物と書物上の記述の違いを記入していることが分かる。

羊次郎はなぜこのような作業を行わなければならなかったのか。後藤家による刀装具の鑑定書について、羊次郎は『日本装剣金工史』で次のように述べている。

古鑑定書を研究する際に、上代の作物には、何時も夢想の鑽の大事あり、口伝とありて、此夢想の鑽とは何んであるか久しき間一向訳がわからず、先輩はもちろん後藤家元に就き質したが嘗つて之を知るものがなく、鑑定書中の暗礁であつたが、八九年前実物比較研究よりして始めて之を了解し得たものである。是等の事は、予が多年苦しんで発見せし事柄ゆえ、是非後の研究者に残して其の労を省きたしと思ふ。<sup>35</sup>

すなわち、後藤家による刀装具の鑑定書には本文に明記されない箇所があるために、羊次郎は実態を知るのに

難渋したのである。しかし書入れに残されたような刀装具の実見を通じて羊次郎は口伝等にあたる知識をつきとめ、その内容を『日本装剣装剣金工史』等の著作に記したのだ。

『金工鑑定秘訣』の書入れで言及されている「拝見」の出来事は、一八九八（明治三一）年二月に加納夏雄が亡くなってから、一九〇〇（明治三三）年八月に中央刀剣会が発足するまでの時期に相当する。師を失い、研究の助けとなる会もない中で、羊次郎は意欲的に研究を続けていたのである。

## 六 終わりに

以上見て来たように、羊次郎は「百卷の鑑定書を読み、懇切なる先輩の指導により、数多の実物を歴覧」（『日本装剣金工史』）することを自らの研究方法として実践していたと言えるのではないか。

これらの研究の蓄積を以て、羊次郎は、一九〇四（明治三七）年に『装剣金工談』、一九〇九（明治四二）年に『彫金家年表』、一九二一（大正一一）年に『古今装剣金工一覽』等を世に送り出し、刀装具の鑑定に必要な金工師

売に参加したこと等が記されている。<sup>29</sup>それを裏付けるように、「独楽集」には刀装具の受取書や互いの収集品交換の申し出についての書簡が収められているほか、桑原文庫に売立帳が残されている。<sup>30</sup>

また、羊次郎は名家が所蔵する刀装具の実見も行っているが、その記録が意外なところに残されている場合がある。所蔵する図書への書入れである。これは「桑原羊次郎と桑原文庫」展の準備において筆者が確認したものである。書入れのあった『金工鑑定秘訣』（全二巻）は、文政二（一八一九）年に発行された木版本である。この巻之一見返しには、羊次郎と思しき筆跡で次の書入れがある。

明治三十一年九月廿二日松平家ニ於テ拝見セシ後藤彫物ニ付キ 見<sup>一字抹消</sup>タル事柄本書ニ朱書ヲ以テ記入ス 凡テ此等ノ品ハ造ハ折紙ノ添フル珍品ナリ 朱書ハ本書ノ記事ト実物ノ異ナル点ヲ主トシテ記入セシモノナリ

拝見目録

金紋俱利伽羅龍三処揃 裏哺金

祐乗作 乗真作 徳乗作 栄乗作 顕乗作 即乗作  
程乗作 廉乗作 壽乗作 延乗作  
金紋這龍三処揃 裏哺金  
祐乗作 宗乗作 乗真作 光乗作 即乗作 廉乗作  
通乗作<sup>31</sup>

この記述より、羊次郎が、一八九八（明治三一）年九月に室町後期から続く著名な金工師一門である後藤家の刀装具を松平家で実見する機会を得ていることが分かる。<sup>32,33</sup>なお、三処揃（または三所物）とは、筭、小柄、目貫の三種を同一の金工師の作でそろえたものであり、裏哺金とは刀装具等で用いられる技法の一つである。すなわち、羊次郎が目にしたのは、金を施された俱利伽羅龍や這った態勢の龍の図案で統一された筭、小柄、目貫が一式となった刀装具であると思われる。祐乗等とあるのは後藤家の金工師名であり、松平家には書入れに挙げられた金工師ごとの三処揃がそろっていたのであろう。

この「拝見」の結果、羊次郎は現物と資料の記述とが異なることに気づいたものと思われる。同本の巻之二には羊次郎がまとめた後藤家の金工師ごとの彫の特徴の書

#### 四 指導者等との人脈 —書簡集「独楽集」より—

先に述べたように、羊次郎は加納夏雄の指導を受けながら研究を始めた。加納は優れた金工師であり、帝室技芸員や東京藝術大学の前身校・東京美術学校の教授を務めていた。羊次郎の著作には加納に言及した箇所が多数あるほか、東京美術学校構内に建てられた加納の銅像台座に弟子の一人として自分の名が列記されたことを「光栄」としている。羊次郎が加納に刀装具鑑定を学んだのは四〜五年間という短い期間ではあるが、加納の知見に負うところが大きく、深く敬愛していたことが見て取れる。<sup>21</sup>

加納の没後、羊次郎は中央刀剣会の審査員や東京金工協会学芸賛助員等を務め、刀装具愛好家や金工師と広く交流した。<sup>22</sup> 加納亡き後、彫金技術の知見については、加納の弟子である海野勝珉から教えを受けていたが、羊次郎はそれだけに依存することはなかったようだ。<sup>23</sup> 刀装具の需要先は、江戸期では大名家と裕福な町人、明治以降は財界人が主であった。<sup>24</sup> 羊次郎が属した中央刀剣会は、当時の政界・財界の著名人が多く名を連ねており、「刀

剣会発起ノ趣旨」によると発起人として坊城俊章や松平頼平のような公家・武家の出身者、岩崎弥之助のような財界人の名があり、一九四一（昭和一六）年時点の名簿でも山内豊景などの華族等が所属していることが確認できる。<sup>25</sup><sup>26</sup> 中央刀剣会には、刀装具を実見したりその知見を交換したりするのに適した人脈があったことは想像に難くない。国内の金工師や同好の士から届いた手紙の一部は、羊次郎が「独楽集」と名付けた全一卷の書簡集に収められている。これらの手紙から、羊次郎がそうした人々と連絡を取り合って情報を交換していた様子が分かる。<sup>27</sup>

羊次郎の交友は日本国内にとどまらなかった。羊次郎の著作や未刊行の原稿からは、欧米の愛好者との交流から様々な刺激を得ていることが見て取れる。これについては「桑原羊次郎とその美術工芸研究」（村角紀子著）に詳しい。<sup>28</sup>

#### 五 刀装具の実見手段 —蔵書への書入れより—

羊次郎は刀装具の収集を行っており、羊次郎の著作に加納旧蔵の刀装具や知人の所持品を譲り受けたこと、競



を読み、懇切なる先輩の指導により、数多の実物を歴覧し、能く其手癖を見覚え、年代系統流派を察し、比較対照して始めて能く真鑑を得べきものである。<sup>13</sup>

すなわち刀装具の鑑定において、文献から知見を得ること、先達の指導を受けること、実際に刀装具を確認することを羊次郎が重視していることが分かる。

羊次郎はここに己が理想とする刀装具研究家としての姿を示しているのではないだろうか。以下、桑原文庫の収蔵資料に基づき、書物の収集、指導者等との人脈、刀装具の実見手段の点で羊次郎の研究手法を概観したい。

### 三 書物の収集

羊次郎は様々な方法で刀装具研究の検討材料となる資料を得ている。ある時は寺の過去帳や墓碑銘を確認し、ある時は家々に残された文書や図書館の蔵書を用いた。<sup>14</sup>一方、手元にも刀装具研究に使用したと思われる図書を残している。桑原文庫は、羊次郎旧蔵の図書、著作の原稿、知人からの書簡等で構成されており、図書としては、江戸時代から昭和期に書かれた武具、刀、刀装具やその作

り手である金工師に関する書物八〇点以上があるほか、現在受入作業中のもののなかにも刀装具関係資料が数多く含まれている。例えば、羊次郎が最初に入手した刀装具関係の資料は『鑿工譜略』と『装剣奇賞』であると思われるが、同題の図書は桑原文庫に残されている。<sup>15</sup>

また、受入作業済みの資料には、部分的に来歴が判明したものがある。江戸時代に発行された刀剣・武具関係史料の多くは、故実家である伊勢貞丈・享保二（一七一七）年生、天明四（一七八四）年没）の著作を書写したものである。伊勢貞丈は女官の装束から元服の儀式にいたるまで幅広い物事について執筆しており、刀剣や武具関係の書物も見られる。これらの資料は、伊勢家から松江藩士・望月家へ直接伝授された資料であり、望月家旧蔵書であったが、後に桑原文庫に収められた。<sup>16, 17, 18</sup>

その他、羊次郎が金工師・海野勝珉所蔵の希少な刀装具関係書を書写して私家版を作成していたことや、こうして集めた資料を読み比べて情報を精査していたことが桑原文庫所蔵の写本への書入れ、羊次郎の著作、羊次郎没後に書かれた知人の回顧談等から読み取れる。<sup>19, 20</sup>



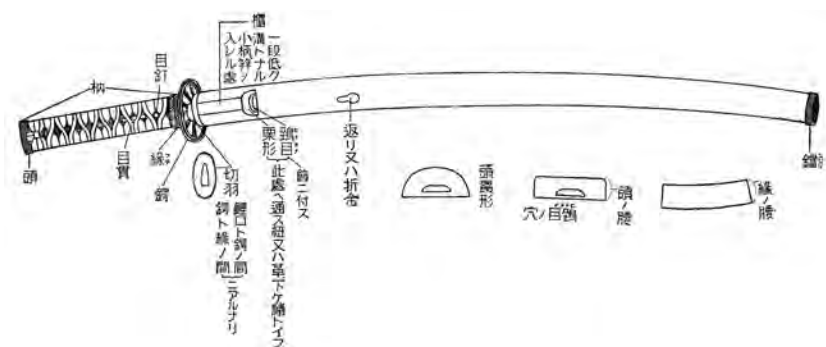


图2 打刀棒<sup>8</sup>

ることに気付き、  
一八九三〜一八九四  
(明治二六〜二七)  
年に帰松していた折  
に刀装具を購入し  
た<sup>7</sup>。羊次郎は関連書  
を読んで刀装具の作  
り手である金工師の  
経歴を調べたもの  
の、真贋について  
つかみきれず、最終  
的に安来市出身の彫  
刻家・米原雲海らの  
紹介で金工師・加納  
夏雄に刀装具の鑑定  
を依頼した。その後  
羊次郎は加納と親交  
を深め、一八九六(明  
治二九)年以降は本  
格的に刀装具鑑定の

手ほどきを受けるようになる。こうした半次郎の熱意の裏には、海外で日本の刀装具が人気を博しているのに対し、同時代の日本では忘れ去られていたことへの思いもあつたようである。<sup>9,10</sup>

羊次郎は犬養毅らが発起人となった中央刀剣会で審査員となり、その研究成果を『刀剣会誌』『日本美術』に寄稿する等、刀装具研究家としての道を歩んでいった。<sup>11</sup> 羊次郎の著作は現代でも刀装具に関する基本書として扱われることがあるほか、市場に羊次郎の箱書きがある刀装具が出た場合は、その旨が特筆される場合もある。<sup>12</sup>

このように現代の刀装具研究や鑑定にも影響が残る羊次郎だが、加納からの教え以外に、刀装具に関する知見をどのように得て、どのように研究を進めていったのか。羊次郎の刀装具研究の代表作『日本装剣金工史』には、「真正なる鑑定家」のあるべき態度が述べられている。

元來鑑定的事たる、書画と謂わず、能くその真擬を弁し正否を論ずるは、易に似て甚だ易ならず、寧ろ難中の大難事と云うべしである。真正なる鑑定家とは、其大部分は之を天質に帰すべく、百卷の鑑定書

務、一九一〇（明治四三）年の日英博覧会では美術部委員を務め、一九一三（大正二）年まで欧米に滞在して各地の美術館や欧米人のコレクター等のもとを訪問した。後半生では主に松江に居住し、ラフカディオ・ハーンの顕彰を行い、財団法人私立松江盲啞学校の校長となる等、さまざまな文化・社会事業に着手したほか、衆議院議員（一期）も務めた。これらの業績により、没後、松江市名誉市民の称号を贈られている。<sup>3</sup>

羊次郎の活動範囲は、地域社会から海外、実業界から学術界までとわけて広範で、その成果は、羊次郎の旧蔵品からなる桑原文庫（島根大学附属図書館蔵）でうかがうことができる。桑原文庫の中心となる資料は、一九五九（昭和三四）年に桑原家から購入され、その後同家より二〇一三（平成二五）年と二〇一五（平成二七）年の二度寄贈を受けた。<sup>4</sup>これには刀装具、日本刀、武具に関連した資料が数多く含まれており、それらは、羊次郎による刀装具研究の手法等を読み取ることができる点で重要なものである。

近年、羊次郎の活動が注目されつつある。二〇一八（平成三〇）年には生誕一五〇年を記念し、四月に島根県立

古代出雲歴史博物館、九月に島根県立美術館で小企画展が行われた。島根県立美術館の展示と連動する形で、当館でも「生誕一五〇年 桑原羊次郎と桑原文庫」展を開催した。これらの展示により、美術史家・桑原羊次郎の全体像が明らかになり始めたところである。

本稿では、二〇一八（平成三〇）年に島根大学附属図書館で開催した桑原文庫に関する企画展および資料受入作業を通じて得られた知見のうち、特に桑原羊次郎の刀装具研究について整理したい。

## 二 羊次郎の刀装具研究

日本刀の外装となる柄つかや鞘こぶに付属する目貫めぬき、鐔つば、筭こうがい、小柄等の金属等で作られる品を刀装具と呼ぶ。

刀装具研究は、羊次郎の研究活動の中で大きな位置を占めると同時に、没後も高く評価された。<sup>5,6</sup>羊次郎は、鐔つばよりも、目貫めぬき、筭こうがい、小柄等に関する論考を中心に残している。

羊次郎が刀装具を見知ったのは実は海外でのことだった。羊次郎はジャポニスムが流行していた時期のアメリカに留学した際、現地で刀装具の収集が行われてい

## 桑原文庫に見る桑原羊次郎の 刀装具研究

島根大学企画部図書情報課企画・整備グループ

佐藤陽子

### 一 始めに<sup>1</sup>

松江市出身の桑原羊次郎（号「双蛙<sup>そうあ</sup>」慶応四・明治元（二八六八）年生、一九五五（昭和三〇）年没）は、刀装具や肉筆浮世絵等の研究者、コレクターとして知られるほか、郷土史家、社会事業家、政治家の顔も持つ多才な人物である。

羊次郎は松江藩の御用商人を務めた桑屋太助本家の次男（戸籍上は三男）として生まれ、中央大学の前身校・英吉利法律学校を卒業し、家督を継いだ。これにより羊次郎は松江に一時帰郷することになったが、羊次郎前半生の活動は故郷のみにとどまらなかった。結婚後ミシガン大学で法学修士号を取得し、帰国後は鴻池銀行等に勤



図1 1912（明治45）年ニューヨークで撮影された写真<sup>2</sup>  
左から堀市郎（松江市出身の写真家）、桑原羊次郎、野口英世

## 淞 雲

島根大学附属図書館報 第22号

---

2020（令和2）年3月31日 発行

編集・発行 島根大学附属図書館

本 館 〒690-8504 松江市西川津町1060  
TEL (0852) 32-6083 FAX 32-6089

医学図書館 〒693-8501 出雲市塩冶町89-1  
TEL (0853) 20-2092 FAX 20-2095

印 刷 今井印刷株式会社



島根大学附属図書館